The 40th
2017 (平２９)
北見テニス協会 記念誌
創立４０周年記念誌発行、記念行事
新コートハウス完成（予定）
2015 (平２７)
2009 (平２１)
オムニコート全面改修
休憩用カーポート設置
2007 (平１９)
創立３０周年記念行事
1998 (平１０)
オムニコート８面（軟式合計１６面）
[新]夜間照明７面
1992 (平４)
創立１５周年記念誌発刊
(昭５９)
硬式コート７面
夜間照明２面増設（計６面）
1979 (昭５４)
硬式コート４面
夜間照明２面増設（計４面）
1978 (昭５３)
コートハウス設置
1977 (昭５２)
北見テニス協会設立
硬式コート３面

目　　次

1. 北見テニス協会創立 40 周年を記念して

2. 歴代会長およびご家族からの一言

3. 北見テニス協会 40 年の歩み

4. 北見テニス協会の会員動向と財務状況

5. テニスの思い出及びクラブ紹介

6. 北見テニス協会歴代の役員

7. 北海道テニス協会等受賞者及び対外試合での優勝者

8. テニス環境に変化

9. 北見テニス協会行事

10. 都市対抗テニス大会

11. 北見テニス協会主催大会

12. 女子連北海道北見地区の活動

13. 北見テニス協会会則及び申し合わせ

14. 編集委員、実行委員からの一言

1. 北見テニス協会創立４０周年を記念して、祝辞とお礼

創立４０周年に感謝をこめて

北見テニス協会会長
常本　秀幸

第１回中学校団体戦での一コマ

北見に硬式のテニス協会を作ろうと活動を開始してから４０年、北見テニス協会の運営にかかわってきましたが、これまでの歩みをこのような記念誌としてまとめられることになり、大変うれしく思っております。北見テニス協会の活動の拠点は東陵公園テニスコートですが、大変利便性の良い場所にあることから、朝早くから多くの方が朝練に励み、日中は主婦の方、午後はジュニア層、そして夜はナイターを使ってプレーを楽しんでおり、良い汗と大きな笑い声が絶えることなく、市民の健康増進の場として大いに活用されていると思っております。

北見テニス協会の４０年の歩みについては、本文に詳細に記載されておりますので、そちらを見ていただきたいと思いますが、１０万都市のテニス協会としては、優良組織ではないかと自負しております。ここまで成長できましたのは、会員皆さんの努力と協力が第一でありますが、北見市や北見市教育委員会のスポーツ振興にかける高い理念があってのことであり、施設整備や利用形態などの点で種々ご配慮いただいており、改めて感謝申し上げます。また、北海道テニス協会や北見市体育協会からも、強化普及活動の面でご支援をいただいており感謝申し上げると共に、引き続きご指導いただきたくお願い申し上げます。さらに、テニスでは先輩にあたります北見軟式テニス連盟には、施設整備やコートの管理などで連携して活動いただくなど、お世話になっておりますが、今後とも両協会の発展にご協力いただきたくお願い申し上げます。

北見テニス協会の役割はテニスの普及と地域のテニスレベルの向上が第一ですが、多くの方にテニスを楽しんでいただき、生涯スポーツとして、また、仲間づくりの場として活用いただければとも思っております。現在会員は４００人程度ですが、錦織圭選手の影響もあってジュニア層の会員が増えてきているものの、一般の方が減少傾向にあります。スポーツ離れの影響が当協会にも現れており、改めて普及活動に力を入れなければとの思いでおります。

創立４０周年記念で記念誌を発刊する団体は少ないと思いますが、創立１５周年で記念誌を作ってから 1/4 世紀になり、記録と記憶の継続を考えると１０年後の５０周年での出版は難しくなるのではないかとの意見もあり、編纂作業を開始させてもらいました。幸い、議案書や会報などが残されており、記憶を喚起しながら皆さんに多くの思い出話を寄せていただき、素晴らしい記念誌にまとまったことに感謝しております。

最後になりますが、創立４０周年記念誌にご寄稿いただいた皆様、記念誌編纂にご協力いただいた編集委員会の皆様、記念行事の実施にご尽力いただいた実行委員会の皆様に心より感謝申し上げ、お礼の結びとさせていただきます。

市長等からの祝辞、および
会長経験者からの一言は原稿依頼中

3.　北見テニス協会 40 年の概要

北見市でテニスと言うと軟式テニスを指した時代が長く続いた。北見の軟式テニスは、大正時代から現在に至る９０年以上の歴史があり、道内でもトップクラスの実績を重ねており、北見市では硬式テニスが普及する環境になかった。そのような状況であったが、北見工業大学が設立され、北見外から赴任して来た教職員の中に硬式テニス経験者が何人かいて、昭和４０年代後半から同好会ができ、硬式テニスを楽しんでいた。一方、上常呂にある北海道糖業（株）（旧芝浦製糖）内にも、道外からの転勤者に硬式テニス経験者が数名いて、工場内のコートで活動していた。

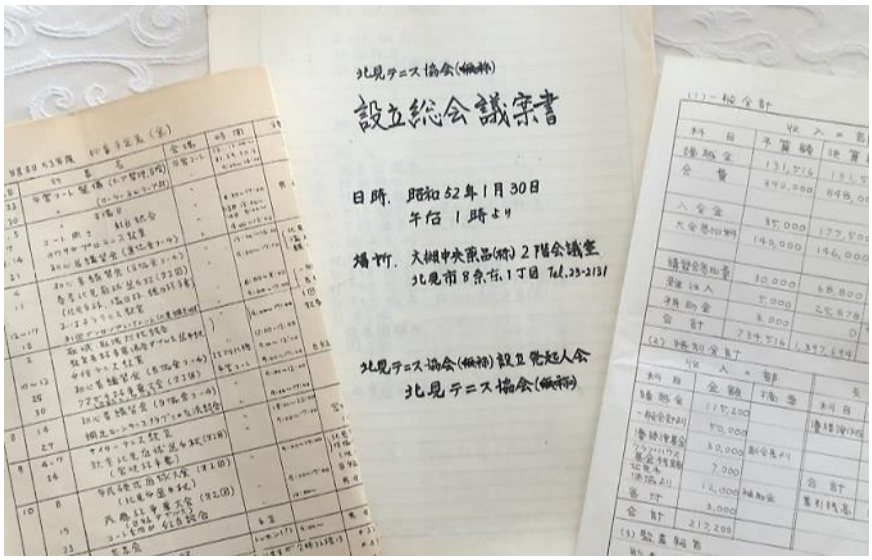
両者の関係者が顔を合わる機会があり、テニス交流会の話が持ち上がり、昭和４９年から両者の交流試合が始まっている。もっと多くの方に硬式テニスを楽しんでもらおうと、協会設立の話が出て行動を開始したが、その中心となったのが、初代事務局長の塩田衍氏と初代理事長の岡宏氏であった。昭和５１年には北見テニス協会設立発起人会が発足し、北見市体育協会や軟式庭球協会と調整するなどして、昭和５２年１月３０日、宮澤郁夫先生を初代会長として、北見テニス協会が産声を上げた。

以来４０年、多くの方々が協会の発展に尽力いただいたおかげで、着実に歴史を刻み今日を迎えている。その概要を以下にまとめているが、多くの方との出会があり、また、楽しいテニスの輪が広がっているが、今後のさらなる発展を祈念したい。

３－１　協会創立からの１０年間（昭和５２年～昭和６２年）

＜協会名＞　協会の設立に当たって、協会の名称でも苦労があった。当時、軟式テニスが北見庭球協会となっていたこともあって、当協会は北見テニス協会として北見市体育協会に登録した。しかし、道協会から庭球協会とするように指導があり、軟式協会に名称の変更をお願いした。軟式協会に快諾いただき、他都市にならって硬式を北見庭球協会とし、軟式は北見軟式庭球協会となった。しかし、昭和５６年に日本庭球協会が日本テニス協会となったことから、北見庭球協会も名称の変更が求められ、当初の北見テニス協会に戻っている。軟式協会には申し訳ないことをしてしまった。

＜事務局業務＞　当協会設立の立役者だった初代事務局長の塩田氏が、設立総会２か月後に心筋梗塞で帰らぬ人となった。協会としては大きな痛手ではあったが、常本秀幸氏が後を継いで創立初年度の活動を開始している。当時の資料が残っているが、ワープロもなく、議案書などは手書きで作られており、癖のある文字の議案書や大会日程など、当時がしのばれる。いわゆるゼロックスでのコピーが高額の時代で、青焼きというコピーや、大量の場合は大学の輪転機を借用し、自前で印刷していた。多くは手書きであったが、会則や会報などの正式文章は和文タイピストに依頼した。その後、簡易和文タイプライターが出てきたので、それを使って原稿を作ったこともある。調べてみると、昭和５９年の議案書から手書きがなくなったので、このころからワープロ等を使ったのだろう。印刷も平成４年頃から外注印刷になっており、事務局の仕事も少し楽になっている。



手作りの議案書（中央は設立総会議案書）

＜コートの増設＞　協会設立からの１０年間で苦労したのはコートの確保であった。東陵運動公園のテニスコートは当時クレーコート６面しかなく、軟式が使っていて硬式が使うだけの面数がなかった。協会設立と同時に市にコートの拡充を陳情した結果、現在の場所に６面増設することが認められた。完成までは北見工大や北海道糖業のコートを借りて講習会などを行った。現在の場所は当時屋外バレボールコートだ

ったが、バレーは屋内が主流になり使われていなかったので、早期に改修に取り組んでもらえた。６面増設されたが、軟式の会員数が多かったこともあり、我々が常時利用できるのは３面だけで、会員が２００人を超えていたため、待ち時間が長く、皆さんに迷惑をおかけした。当時は第２次テニスブームの影響で会員が急増しており、昭和５８年には８００人近くが登録されている。

創立からの１０年間の年表（昭和５２年～昭和６２年）

年号	トピックス
昭 49 年	・北見工大と北糖の交流試合が始まる
昭 51 年	・北見テニス協会設立発起人会発足
昭 52 年	・宮澤郁夫初代会長の下、北見テニス協会設立 ・コート６面の新設を市に要望、軟式９面、硬式３面でスタート ・宮澤会長より夜間照明２面分が寄贈される ・道協会による講習会開催 ・全道都市対抗に初参加 ・塩田初代事務局長逝去
昭 53 年	・カワサキ専属北村元延テニス講習会 ・北見庭球協会に名称変更 ・コートハウス設置を市に要望し実現
昭 54 年	・コート４面が利用可能になる ・協会費用で夜間照明２面増設、合計４面 ・九鬼　潤プロによる講習会開催 ・蝶間林利男デ杯コーチテニス講習会
昭 55 年	・朝日生命テニススクール開催 ・全道都市対抗戦が２部制になる ・日本庭球協会公認指導員を２名取得 ・日本女子連北海道支部創設
昭 56 年	・北見テニス協会に名称変更 ・全道都市対抗２部で優勝、１部に昇格 ・第１回道東都市対抗戦、網走で開催 ・加藤幸夫プロテニス教室開催
昭 57 年	・ダンロップ全道大会女子伊藤・高木優勝 ・岡宏氏が島根国体に出場 ・道東都市対抗戦北見で開催
昭 58 年	・全道都市対抗１部で敗れ、２部降格 ・スポーツ指導員９人誕生
昭 59 年	・軟式・硬式ともにコート７面への増設を市に要望し実現 ・ナイター設備を増設、硬式６面に配置 ・全道都市対抗２部で優勝、再び１部
昭 60 年	・佐呂間町、紋別市に講習会講師派遣
昭 61 年	・岡氏、45 歳以上で全道ランキング１位 ・岡宏氏山梨県国体出場

宮澤会長から市長へ照明塔の寄贈

協会設立当初より、使用可能なコート数が少ないことを気にされていた宮澤会長から、ナイター照明２面分の寄贈があった。管内初のナイターコートだったと思うが、これで会員も増えたようだ。また、昭和５４年からは４面使えるようになったが、増加する会員に応えられるだけの面数ではなかった。そこで軟式と共同でコート増設を市に要望した結果、昭和５９年に軟式側に１面、硬式側にシングルスコートが１面増設された。上側７面の内１面は両協会共用ではあったが、これで６面使えるようになり、待ち時間がかなり改善されている。夜間照明も昭和５４年に２面分、昭和５９年にも２面分を自己資金で増設し合計６面が照明され、朝早くから夜間まで多くの方に楽しんでもらえるようになった。なお、シングルスコートは大会運営に支障があったことから、既存コートのコート間幅を少し狭くして、ダブルスコートへの改修をお願いし、昭和６３年に完成している。

＜普及活動＞　組織の設立初期はどのような組織でも課題が多く、多忙な時期であり、当協会もコート整

備やハウスの設置など市との交渉にかなり時間を取られた。また、初心者講習会も大変だった。

講習会開催と言っても、コートが少なく指導経験者がいない状況であった。急遽、道テニス協会に講師の派遣を依頼して講習会を開催してもらった。また、市内のスポーツ店などにプロ指導者の招へいをお願いし、九鬼選手（昭和５６年、世界ランキング７４位）など著名なプロ選手にも来てもらった。また、プロの指導者から講習方法の指導を受けるなどして、役員が中心となって、数多くの初心者講習会を開いている。これらの詳細については第９章を見てもらいたい。当時の日程表を見ると、おはようテニス教室、女性テニス教室、ナイターテニス教室、ジュニアテニス教室、初心者講習会、室内テニス教室などがあり、いずれの教室も参加者が多く、役員は球出しにてんてこ舞していた。役員の中には、朝の講習、夜の講習の他に大会のない日曜などにもサービス講習を開催しており、また、指導の希望があればコートに出向くなどして、家庭サービスを忘れてしまったような人もいたようだ。幸い、昭和５５年に日本庭球協会の２級公認指導員が２人誕生し、その後も日本体育協会指導員なども増え、指導体制が充実し、近隣協会の講習会に講師を派遣できるまでになった。

九鬼プロによるテニス教室

＜強化活動＞　テニス協会としては普及活動と併せて、競技力の向上も必要であり、設立初年度から全道都市対抗に出場して競技力の底上げを図ってきた。その結果、協会設立４年目の昭和５６年には１部に昇格している。また、中標津テニス協会にいた北見工大テニス部ＯＢからの提案を受け、道東地域のテニスの普及・強化を目指して昭和５６年から道東都市対抗戦を実施している。当初は４都市（釧路、網走、中標津、北見）であったが、現在は１０都市以上の参加となっている。

この頃は当協会員の全道大会への個人参加も多く、旭川や札幌の大会に毎回数名の選手が遠征していた。そんな中で、昭和５６年には、岡　宏氏と伊藤信子さんが全道大会で優勝しており、お二人はその後も何度も優勝を経験している。また、岡氏は昭和５７年島根国体に成年男子の北海道の代表となり、昭和６１年には壮年の全道ランキングで１位になっている。このように、男子岡氏、女子伊藤さんの競技力の向上にけん引され、北見テニス協会の競技力も他都市に負けないまでになってきた。

道東都市対抗の北見初開催

３－２　創立１０年～２０年の概要（昭和６２年～平成８年）

組織も１０年経つと安定期に入るのだが、確かに昭和５７年ころのテニスブームは沈静化し、会員数も４００人程度で推移するようになる。しかしながら、思わぬ出来事が続いた創立１０年後からの１０年間であった。

＜悲報＞　当協会創立時より、物心両面で協会を支えていただいていた宮澤会長から、５期１０年間を機会に会長職をバトンタッチしたいとの申し出があった。宮澤会長には、設立時より多くのご苦労をおかけしたこともあり、申し出を尊重し、名誉会長として見守っていただくこととなった。昭和６３年からの会長であるが、宮澤会長からの推薦もあり、岡氏に第２代会長をお願いし、快諾を得ることができた。これで、協会の競技力などが一段と向上すると期待していた矢先に、岡会長は長期の治療が必要であることがわかった。衝撃だったのは、岡会長と宮澤名誉会長が平成４年に相次いで病気で他界されたことである。協会の支柱を失ったのだが、これまで、ご夫妻で当協会の発展に尽力されていた伊東秀雄氏に第３代会長を引き受けていただき、理事長、事務局長はじめ役員が一丸となって、この難局を乗り越えている。

＜１５周年記念誌発行＞　平成３年に創立１５周年を記念して記念誌を発刊することになり、伊藤陽司氏と常本氏が中心となって、冊子の編集に当たった。岡氏からは、他界される１か月前の平成３年１２月、病床から寄稿いただいている。また、宮澤名誉会長からも心温まる寄稿をいただいたが、このころから体

調がすぐれなかったようだ。

記念誌表紙の表題は書道家の荒木岑翠さんに、中表紙には画歴のある油田優子さんにお願いして書いてもらった。また、岡会長を偲ぶ常本氏の詩が載せられた。記念誌は、多くの企業からの寄付もいただき、平成４年４月に完成し、千円で販売された。話題豊富な内容で評判が良かったが、写真の仕上がりが悪くこの点は不評だった。

＜テニス環境＞　創立１０年以降の概要であるが、市内におけるテニス環境が一変した。平成５年にモイワスポーツワールドに砂入り人工芝コートが４面できた。また春光町の河川敷や豊地にもハードコートが作られ、無料で誰でも使えるなど、他都市に誇れるテニス環境となった。また、民間でコートを作りスクールを開設する人も出てきており、協会設立時を考えると隔世の感がある。普及活動の点で見ると、昭和６３年時点で日本テニス協会２級公認指導員が５人、日本体育協会スポーツ指導員（テニス）が８人となり、普及活動を組織的に行えるようになった。

// 岡前会長を偲ぶ会開催 //

4月18日、本年1月27日に亡くなられた岡前会長を偲び、協会としてのお別れの会を催しました。

ご遺族を始め、市長、教育長、体教会長等６０名が出席し、遠くは稚内、旭川等からのなつかしい顔も見受けられました。

思い出話をしながら岡会長の人柄を偲び涙と笑いの中お別れをさせていただきました。

// 岡メモリアル基金寄贈される //

岡先生の遺族より２００万円と言う高額の寄付を受けております。

協会理事会で相談をし、協会特別会計から５０万円を追加してその利子で岡メモリアルトーナメントの運営をする事にしました。

// １５周年記念誌発行 //

岡先生を偲ぶ会に引き続き、協会創立１５周年記念パーティーを開催しました。協会創立のビデオ、１５年間を振り返ってのスライド映写、また、色々な方々からの思い出話など時間を忘れた一時でした。また、この日１５周年記年誌を発行しております。１５年の歩、各種大会の記録、会員からの一言など写真を沢山入れ楽しく作られております。

平成４年７月の会報（岡氏偲ぶ会と１５周年記念誌）

また、北海道で開催された「はまなす国体」に向けた審判員養成があり、6人（岡、常本、時任、因、伊藤直、松田）が公認審判員として認定され、平成元年に行われた野幌での国体で公式審判員を経験している。基本はセルフジャッジでありスコアコールが中心だが、オーバーコールができるシステムだった。一人２～３試合の割り当てであったが、緊張の３日間であったを無事終えたそうだ。

会報

北見テニス協会　No.37　'92.11.26

事務局　北見市三芳町５丁目５　湯浅整骨院内

Tel.　25－2772

コートハウス　61－2900

// 宮沢名誉会長が逝去される //

北見テニス協会設立から12年間、協会発展のために会長としてご尽力いただいて来た宮沢先生(67才)が、10月10日体育の日に亡くなられました。先生は協会設立時の施設の充実から会の円滑な運営等種々の面で協力され、協会発展の基礎を作られました。その中でも先生の開院15周年を記念して北見市に寄贈いただいた夜間照明は勤めを持った人達への普及のみならず競技力の向上に大きな効果をもたらし、協会としてまたとない贈り物となりました。また、コートハウスの設置、コートの増設要望には率先して市との交渉に当たられ、現在のような施設ができ上がっております。さらに、宮沢杯の寄贈、プロコーチの派遣等、協会の発展、充実に対する思いには頭の下がる思いがいたします。このような功績に対し北海道テニス協会から功労賞、北見市体育協会30周年の折には功労賞もいただいております。協会設立から数年間は自分で勧誘した新人への球出しをしたり、お嬢さんの由紀子さんと楽しいテニスをされておりました。耳を悪くされてからお嬢さんの応援等ベンチ入りしましたが、あの頃の姿が思い出されます。協会員も入れ替わりが激しく、テニスを楽しんでいた当時の先生の姿を知っている人は少なくなったと思います。ただ、協会の今日を作って下さった方であり、今後とも続けられる宮沢杯を感謝の気持ちを示す大会としてさらに多くの会員の参加を希望いたします。

10月10日は「体育の日」・また○○と書いて「目の日」にもなっております。今年は体育の日が設定されてから始めての雨、我々にとっては涙雨となり忘れることのできない日となりました。

// 宮沢家よりご寄付をいただく //

宮沢先生が亡くなられもうすぐ49日になりますが、ご遺族から協会にご寄付の申し出がありました。我々としては夜間照明等多大なご協力をいただいていただけにご遠慮しなければと思いましたが、先生のご遺志でもあるとのこと、今後の協会運営や宮沢杯等に大切に使わせていただくことにいたしました。

宮澤名誉会長の訃報（平成４年１１月会報）

＜競技力の向上＞　競技力の向上であるが、岡氏は病気が判明する直前まで大会に出て若手の育成に気をかけていたが、平成になったころから、岡氏と互角に戦える人材が出てきた。特に、皆川正広氏や長谷川智仁氏は、岡氏と優勝を争うようになり、また、全道大会でも優秀な成績を収めるようになった。女性陣も伊藤さんの指導の下、石川優美子さんや皆川縁さんなど数名の方が対外試合に出て優勝できるようになった。もちろん、壮年も岡氏の後をついで高谷氏、常本氏ががんばっており、これらの戦力で平成３年の全道都市対抗では参加４０数都市中、３位という輝かしい結果を残している。

女子連についてであるが、道テニス協会の役員などが中心となって、昭和６０年に日本女子テニス連盟北海道支部が設立された。北見では、当協会発足時より婦人部が設けられその後女子部となり、女性向けの講習会などを行っていたが、女子連からの呼びかけもあり、平成５年に北見でも北見地区を結成され、女子連の大会を実施するようになった。北見の女子連の戦績は常に全道でも上位に位置しており、転勤族の夫人の助っ人も多かったが、北見の戦力アップに大きく貢献してもらった。

創立１０年から２０年の年表（昭和６２年～平成８年）

年号	トピックス
昭 62 年	・道東都市対抗戦北見で開催 ・ダンロップ全道大会壮年で岡・常本優勝
昭 63 年	・全道都市対抗で１部４位になる ・宮澤氏から岡宏氏に会長が交代 ・ナイターポール移設 ・日本テニス協会指導員５人誕生 ・日本体育協会指導員８人誕生
平元年	・はまなす国体に審判員として６人派遣 ・網目の荒かったフェンスの改修
平２年	・宮澤名誉会長、道協会の功労者表彰 ・ウインザーカップテニス大会に 元財務大臣中川昭一氏が参加 ・北海道テニス協会創立 50 周年記念式典 ・北見体育協会創立 30 周年記念式典
平３年	・元副会長、泉氏、鎌田氏逝去 ・全道都市対抗１部で過去最高の３位
平４年	・岡元会長逝去 ・創立 15 周年記念誌発刊と岡先生を偲ぶ会 ・宮澤名誉会長逝去 ・岡川恵美子プロテニスクリニック開催 ・伊東秀雄氏が会長に就任 ・宮澤家、岡家より協会に寄付をいただく
平５年	・道東都市対抗戦北見で開催 ・全道都市対抗１部で負け、２部降格 ・全天候テニスコート要望の署名活動 ・故宮澤氏、岡氏、体協功労者表彰 ・女子連北海道北見地区が発足 ・モイワワールドに人工芝コート４面完成
平６年	・全道都市対抗２部で優勝、１部返り咲き ・日本テニス女子連の幹部が来北 ≪伊達公子プロ引退≫
平７年	・市に人工芝コートの陳情 ・全道都市対抗１部残留ならず
平８年	・ダンロップ道大会で皆川・坂本Ａ級優勝 ・道東都市対抗戦北見で開催

３－３　創立２０年～３０年の概要（平成 9 年～平成 18 年）

この１０年間でのビックイベントといえば、平成１０年に東陵運動公園のクレーコートが砂入り人工芝コートへリニューアルされ、同時に１６面に増設されたこと、もう一つは、平成１２年の第５１回全道都市対抗テニス大会が北見で開催されたことではないだろうか。

＜人工芝コート＞　コートの人工芝化については、平成５年ころから署名活動を開始し、軟式協会とも連携して教育委員会や議会に要望を出すなど活動している。最大の課題は、軟式側、硬式側ともに７面から８面に増設することであった。困難な交渉であったが、現地調査なども行いながら、理事長の大島氏が中心となって実現にこぎつけた。特に硬式側の１６番コートは変則になることから、市の担当部署は難色を示したが、全道規模の大会を考えると全体で１６面のコートは必修条件であることを説明し、粘り強い意見交換を経て、軟式側、硬式側ともに８面の砂入り人工芝コートが完成している。

砂入り人工芝コート１６面と照明７面

夜間照明については、市の予算は軟式、硬式側ともに４面分だったことから、協会として３面追加することになり、伊東会長に一時払いをお願いし、現在の７面照明を実現している。これまでは高いポールをフエンスの外に設置し、４本のポールから２面づつ照明していたが、ライトが目に入るといった苦情があり、新しいコートにはどのようなライト配置が良いか、業者の意見や他都市の例などを基に検討を重ねた。従来より設置費が高くなったが、コートごとにライトをつける方式が良いということになり、現在の配置

となった。

コートのリニューアル・増設によって維持管理方法や使用料金が検討事項としてクローズアップした。市担当部署と繰り返し意見交換を行い、両協会が適正な使用料金を支払うとともに、日常の維持管理を行うことで委託費をもらう方式となった。この交渉には、主として当時の事務局長伊藤陽司氏が当たってくれた。

＜全道都市対抗の開催＞　北海道テニス協会では、全道都市対抗テニス大会を札幌市以外でも開催したいとの意向があり、北見市のコートが平成１０年に１６面に拡充されたことを知って当協会に打診があった。しかし、４０都市以上が参加する大会であり、１６面のコートでは運営が難しいことから辞退も考えた。道協会からは網走テニス協会と共同で開催することが提案され、両者で協議した結果、平成１２年の第５１回全道都市対抗テニス大会を北見市と網走市スポーツトレーニングフィールドテニスコートで実施することになった。主催は北海道テニス協会であり、多くの役員が前日から来北して当協会をバックアップしてくれた。主管は北見テニス協会と網走テニス協会としたが、６０名にも及ぶ実働の役員を北見テニス協会で構成し、常本氏が実行委員長となって準備を開始している。北見市や網走市などの関係部署への協力依頼、大会支援のための寄付依頼、当日の運営体制や懇親会の余興（屯田太鼓）などついて、役員打ち合わせやリハーサルを繰り返して開催にこぎつけている。参加都市は１部～４部まで各８都市、５部１２都市の計４４都市で、参加選手は約 800 名であった。第１日目のブロックリーグは北見と網走のコートで実施し、２日目の順位決定戦は北見で実施している。雨模様の天候もあったが、多くの方の協力で大きなトラブルもなく大会を終えることができ、北見テニス協会の運営力が評価された行事であった。

全道都市対抗開会式と大会プログラム

＜広報活動＞　協会では設立直後の昭和５２年３月から７ページにあるような会報を発行しており、会員に広く読まれていた。女子連からも平成１２年に「WEATHERCOCK」という情報誌が発行された。編集長は文才のある鶴田直子さんで、イラストと少し辛口のコメントが面白かった。残念ながら事務局には９号までしかないが、この後を持っている人がいたら事務局に提供してもらいたい。なお、協会の会報は創立１５周年記念誌で一部紹介されているが、事務局には２２号（昭和５９年７月発行）から５６号（平成１５年７月発行）までしか保存されていない。古い会報をお持ちの方は事務局に譲っていただければ幸いである。なお、平成１６年４月から山田孝一事務局長が当協会ホームページを開設してくれたので、会報に代わって最新の情報が提供されるようになった。（現在のホームページは事務局野嶋氏が担当）

女子連の会報

初代ホームページの表紙画面

＜会長交代＞　岡会長の後を引き継いでいただいた伊東会長から、就任１０年を区切りで会長辞任の申し出があった。伊東会長には全道都市対抗テニス大会やコート改修・増設などの事業を推進していただいたが、ご意向に沿って辞任を受け入れた。役員会において後継者の推薦を求めたところ、高谷俊光氏にお願いすることが満場一致で決定し、本人にも快諾をいただき、第４代会長が決まった。

＜都市対抗の戦績＞　協会の競技力がわかるのは、全道都市対抗や北北海道都市対抗での戦績になる。全道都市対抗では平成１１年を最後に一部から遠ざかっている。特に、全道都市対抗では平成１６年には４部での戦いになり、選手も緊張して臨んだようだ。その後、３部から２部を漂流しており、再び１部に上がる時を待ちたい思いである。道東都市対抗でも１４年間続いた優勝が途切れ、平成１８年に優勝しているものの準優勝が多い。なお、道東都市対抗テニス大会は参加都市が広がってきたことから、平成１８年に北北海道都市対抗テニス大会と名称を変更している。

創立２０年から３０年の年表（平成 9 年～平成 18 年）

年号	トピックス
平 9 年	・砂入り人工芝コート 16 面へリニューアル開始 ・道東都市対抗 15 連覇ならず、釧路に惨敗 ・全道都市対抗 2 部優勝、再び 1 部
平 10 年	・砂入り人工芝コート 16 面、リニューアル終了 ・自己資金でナイター3 面増設、合計 7 面 ・賛助会員制度に 24 人登録 ≪松岡修造プロ引退≫
平 11 年	・全道都市対抗、残念ながら 1 部陥落 ・平 12 年全道都市対抗の北見開催決定
平 12 年	・女子連情報紙　”WEATHERCOCK”発行 ・全道都市対抗、北見と網走会場で開催 ・道東都市対抗戦に帯広市初参加
平 13 年	・全道都市対抗、何とか 2 部残留 ・下込電気より、スピーカーの寄贈
平 14 年	・伊東会長、体協功労賞受賞 ・全道都市対抗、3 部に陥落
平 15 年	・高谷俊光氏が会長に就任 ・女子連創立 10 周年記念で日本テニス協会姫井氏によるルール講習会 ・女子連 10 周年記念大会開催
平 16 年	・山本育史プロの講習会 ・全道都市対抗、4 部で優勝 ・台風でコート周辺の樹木が倒れる ・協会ホームページ開設 ・女子連伊藤慧子メモリアル大会開催
平 17 年	・道東都市対抗戦を翌年度より北北海都市対抗とすることになった
平 18 年	・北北海道都市対抗戦で久々に優勝 ・全道都市対抗、3 部で優勝 ・マナー・キッズテニス教室開催

＜ジュニアの活動＞　この１０年間での特徴として高校生会員の増加、小中生向けの講習会の充実がある。北見管内の高校に硬式テニス部ができたのは、協会設立後数年たってからだったと思う。北斗高校、柏陽高校、藤女子高校で作られ、その後北見工業高校が加わっている。近郊の都市にも広がっており、置戸高校ではテニス歴のある教員の赴任を契機に活動が始まっている。そのほか、斜里高校、佐呂間高校が加わって、平成１５年ころで１５０人近い高校生が加入している。

小中学生の講習会であるが、高谷会長の支援があったのと、捧直美氏のような熱心な指導者がいて受講希望者が増え、50 名以上の子供がテニスを楽しんでいた。

ジュニアの講習風景

現在も続いているが、このころからジュニア用ラケットや空気圧の低いボールなども使われるようにな

り、Play & Stay というジュニア向けの指導方法が取り入れられるようになった。

３－４　創立３０年～４０年の概要（平成１９年～平成２９年）

＜創立周年事業＞　最近の１０年間であるが、創立３０周年記念をどのようにするかから始まって、創立４０周年事業をどうするかで終わることになる。３０周年記念誌の発行の話もあったが、１５周年記念誌が出ているので、記念誌は４０周年か５０周年に発行することになった。結局、資料の散逸を考えると４０周年記念誌として残すことが良いということになり、常本氏を委員長に、これまでの理事長経験者を編集委員として編集作業が始まった。また、現在の事務局及び部門長は実行委員会委員として、実務的な作業を行うことになった。

４人の女子プロによる講習会開催案内

３０周年記念事業であるが、プロ選手の講習会と模範試合の開催ということで、４人の女子プロを招いて講習会を開催してもらった。講師は平木理化さん、岡川恵美子さんなど、トップクラスの選手４人で、模範試合や、協会員相手の交流試合など多くの会員に楽しんでもらった。

創立３０年から４０年の年表（平成１９年～平成２９年）

年号	トピックス
平 19 年	・創立 30 周年記念事業としてプロテニス教室（平木、岡川、吉田、宮内各女性プロ）
平 20 年	・山本育史テニス講習会、 ・福永二郎テニス講習会 ・全道都市対抗 3 部優勝、2 部に昇格 ≪伊達公子プロ復帰≫
平 21 年	・休憩用カーポート設置 ・山本育史テニス講習会、 ・福永二郎テニス講習会 ・全道高体連テニス大会、北見で開催 ・全道都市対抗 2 部敗退、3 部に降格 ・道テニス協会創立 70 周年に会長参加 ・女子連８地区対抗戦で優勝 ≪杉山愛プロ引退≫
平 22 年	・小浦武志テニス講習
平 23 年	・厚谷郁夫氏が会長に就任 ・小浦武志テニス講習会 ・前高谷会長、体育協会功労賞受賞
平 24 年	・全道都市対抗 2 部に昇格 ・小浦武志テニス講習会
平 25 年	・常本秀幸氏が会長に就任 ・砂入り人工芝コート改修に関する協議 ・女子連創立２０周年記念大会開催 ・女子連 WE LOVE SRIXON 全道大会で優勝
平 26 年	・砂入り人工芝コート全面改修開始 ・北見地区中学校テニス団体戦を開始 ≪錦織圭プロ全米で準優勝≫
平 27 年	・伊東元会長逝去 ・砂入り人工芝コート全面改修終了 ・長谷川洋一郎ジュニアテニス教室 ・伊東家より寄付
平 28 年	・コートハウス改築で、市に要望書提出 ・市の Jr アスリートチャレンジ事業参加 ・長谷川洋一郎テニス講習会 ・第 33 回北北海道都市対抗戦開催
平 29 年	・創立 40 周年記念誌発行 ・創立４０周年記念親睦大会開催 ・コートハウス改築

＜施設整備＞　コートや付帯設備の改修についても触れておきたい。ハウス前に休憩所として使っていたテントは、基礎が弱いので台風に対して危険なことから、平成２１年に堅牢なカーポートを市の許可を得て設置し、市に寄贈する形をとった。コートであるが、人工芝化から２０年近くなり、水はけの悪いところとか、バックライン付近が磨滅していて危険な部分が増えてきており、改修の協議が始まった。国の補助事業で行うことになったが、全体の張り替えは認められないとのことであった。そのため、傷みの激しいところだけとの提案もあったが、両協会と市とで何度か意見交換をし、パッチワークのような改修をしないよう強く要望した。最終的には、スポーツ課等から国の補助事業部門への説明が適切だったことから、フェンス内全体に近い張替が可能となった。さらに、コートハウスの改築を申請することになり、両協会と市の関連部門と協議を重ねた。当初、中央付近に一棟を建て、軟式、硬式で共用する案であったが、国の補助事業としては従来の２棟建てでないと難しいことがわかり、種々検討した結果、バリアフリーに対応したハウスとして大きめのハウスが建つことになった。平成２９年内には姿を見せることになるが、コート及びハウスの張替・改築に積極的に取り組んでいただいた市のスポーツ課及び関連部署に感謝したい。

人工芝の全面張り替え工事中

＜会長交代＞　会長の交代であるが、高谷会長から継続年数や年齢もあって、当協会の会長を退任したいとの申し出があり、高谷氏から常本氏の推薦があった。しかし、常本氏が仕事の関係でしばらく北見を離れることになったため、急遽厚谷郁夫氏にお願いすることとなった。厚谷氏は突然のことで固辞されたが、常本氏が戻るまでのピンチヒッターなら、ということで第５代会長を引き受けていただいた。２年間ではあったが、北北海道都市対抗の開催やプロコーチによる室内講習会などをバックアップされ、平成２５年に長野県から戻った常本氏にバトンタッチをしている。

＜ジュニアの活動＞　この１０年間での小中高生の増加と競技力の向上は目覚ましいものがある。小中学生（ジュニア）の指導は時間と根気のいる事業であるが、捧直美氏が中心となって基本的な流れを作り、中塚ひとみさんや和田喜代子さんに引き継がれ、現在は和田さんが中心となり、指導員を増やしながら組織的な活動を展開している。帯広や釧路で開催されるジュニアの大会に参加したり、当協会の高校生を含む大会に参加しているが、高校生を破って優勝する中学生も出てきている。また、日本テニス協会が目指している中体連の正式種目への加盟に北海道テニス協会と連携しながら活動しているが、加盟のためには実績を作る必要があり、北見でも教育委員会やオホーツク中体連の後援のもとで、北見地区中学校テニス団体戦が開催され、平成２８年には男女とも全道大会に参加するまでになった。

北見地区中学校テニス団体戦参加者とスタッフ

高校生も急成長しており、全道の大会でベスト８に入るような選手も出てきた。確かに、球のスピード、守備範囲の広さなど、北見テニス協会一般Ａ級クラスを脅かす存在になっている。このような若手が北見に残ってテニスを続けてくれると良いのだが、ほとんどの若者が北見を離れるのは残念なことである。また、北見に残ってもテニスを続けない人が多いようだ。北見テニス協会の将来を考えると、どのようにして若者に入会してもらえる考える必要があり、ぜひ皆さんからも、テニスは生涯スポーツであり、仲間を増やす場でもあることを宣伝してもらいたい。

４．　北見テニス協会の会員及び財務関係

４－１　会員の動向

＜テニスブーム＞　世界のスポーツ人口を調べてみると、１位バスケット、２位サッカー、３位クリケット、４位テニスとなっている。日本ではウオーキング、ボウリング、水泳の順で、野球が１０位、テニスは卓球の次で１５位だそうだ（平成２４年総務省）。テニスは軟式・硬式合わせての順位と思われるが、軟式２６０万人、硬式４００万人、併せて約６６０万人（平成２５年日本テニス協会）がテニスを楽しんでいる。スポーツを始めるきっかけは色々あると思うが、ブームに乗って始めた人もいると思う。第１次テニスブームは、現在の天皇陛下と美智子妃殿下が軽井沢のテニスコートで出会って結ばれたことがきっかけで起こったものだ。昭和３４年頃の出来事で、北見テニス協会は設立されていなかったが、軟式テニス協会への加入者が増えたかもしれない。

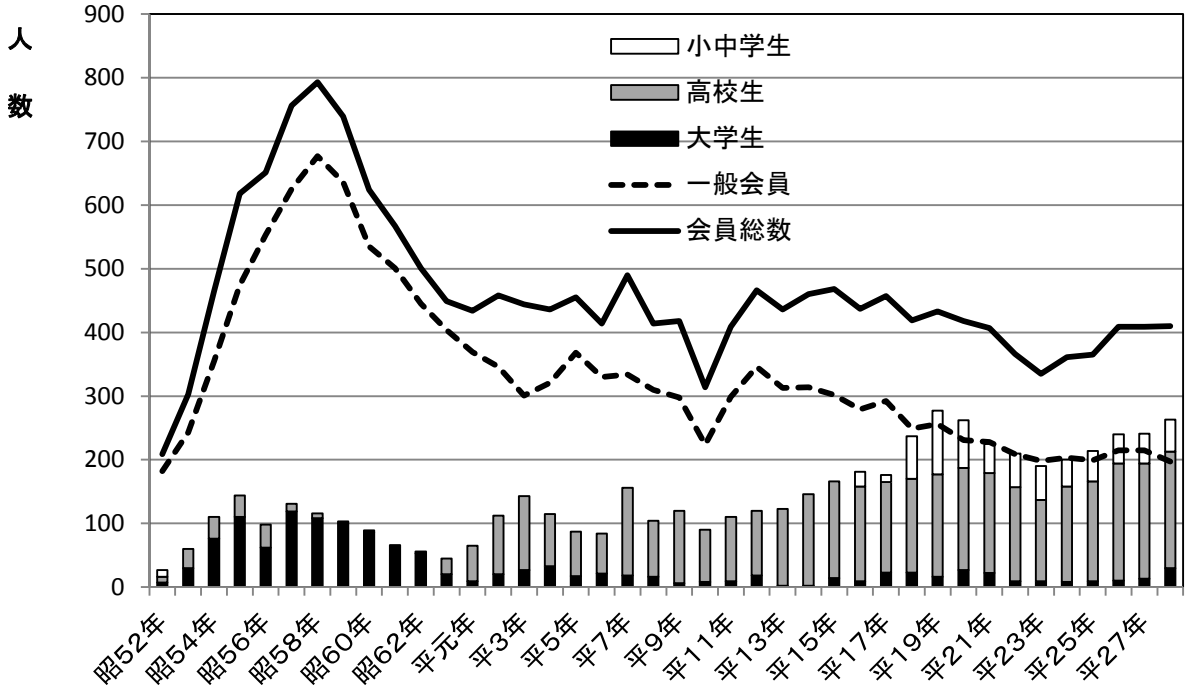
第２次テニスブームは、当協会が設立される少し前の昭和５０年に、沢松和子さんがウインブルドンの女子ダブルスで優勝したのがきっかけだそうだ。本協会の会員数もこのブームの影響もあって急増しているが、ブームの要因としては沢松効果だけでなく、女性でも打ち返せるラケットの進化も見逃せない。重くて、スイートスポットの狭いウッドから、軽くて反発性の良いカーボンに変わった時の驚きは今でも忘れられない。全国でテニス人口が急増し、特に軽井沢や山中湖畔では農地をつぶしてコートを作った時代である。北見テニス協会でも、グラフに示したように数年で会員は４倍に急増した。しかし、昭和５８年の８００人近くがピークで、その後は定着せず平成に入ってからは４００人程度で推移している。残念ながら、一般会員は減少傾向であるが、平成１２年ころから「テニスの王子様」などに刺激されて、ジュニアが増え始めている。特に、この数年は錦織圭選手の活躍で、小中高生が多くなっているようだ。今が第３次のテニスブームかもしれないが、スポーツも多様化の時代を迎えているので、第２次ブームのような会員の急増は望めないであろう。

当時の皇太子様と美智子様
（昭和３３年、軽井沢での一コマ
ネット昭和毎日より転用）

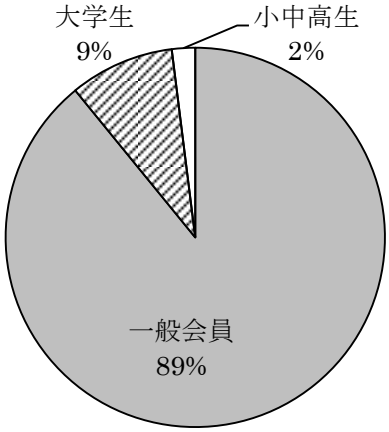
＜会員の構成＞　会員の男女内訳を見てみると、協会設立間もない昭和５３年では男性 57.8%、女性 42.2%と男性が多かった。会員がピークとなる昭和５７年には、男性 52.8%、女性 47.2%と女性比率が増えており、このころは男子大学生が多かったので、一般会員の女性比率はもう少し高かったと思われ、ブームをけん引したのは女性だったようだ。一方、平成２８年度の会員の男女比率は大学生、高校生を含めると男性 55.8%、女性 44.2%だが、一般だけだと男性 53.8%、女性 46.2%となっており、男性会員の減少が今後の課題になる。

創立１０年目と４０年目付近での会員種別比率を調べたのが以下の図である。第 2 次ブームも終わった昭和６２年ころの会員が４５０人程度であったが、一般会員が 90%で、大学生が 8%程度、小中高生は数名程度であった。平成２６年を見ると、会員数は４２０人であるが、一般会員の比率が 50%を切り、高校生会員が 40%に迫っている。また、小中学生は、教室参加者の利便性を考え、ほとんどの小中学生を準会員としているが、その人数を含めると 10%を超えている。小中学生の増加は、多くの方が指導にかかわってジュニア教室が充実してきたからであり、さらに増えることも予想される。小中高生の増加はうれしいことであるが、一般会員の減少が問題である。一般会員の平均年齢が高くなっており、若者の愛好者を増やさなければ会員は減少するのは明らかである。高校生が増えているが、卒業後北見に残る人が少ないことと、残っても継続していないようであり、会員継続に向けた取り組みも考える必要がある。

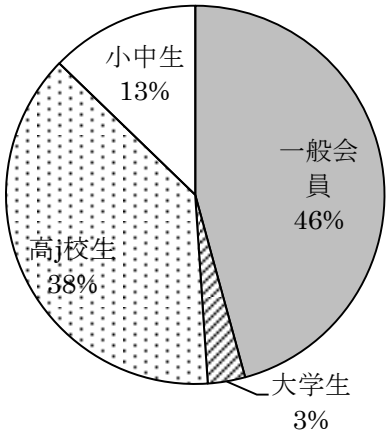
余談だが、会員ピーク時には、大学生が１００人近く登録されていた。北見工大と北海学園北見大学にテニス部があり、活発に活動していた時代で、多くの大学生が大会に参加していた。現在は、大学生の登録は 3%と少ないが、時々レベルの高い大学生が会員になっており、大学院に残ると都市対抗に出られるので、会長が大学院に残るよう説得している場面に出会ったことがある。



北見テニス協会４０年間の会員状況



昭和 62 年前後（会員数 450 人程度）



平成 26 年前後（会員数 420 人程度）

協会設立後１０年と４０年での会員の構成変化

４－２　協会の収支状況

1）一般会計

当協会の収入源は会費、大会参加費、講習会費等であるが、大会参加費と講習会費は収支バランスを考えながら行事を実施してもらっているので、協会運営は主として会費で賄われている。会費の金額や区分などは、その時々の施設整備費の備蓄や他都市の動向などを参考にして決めてきており、以下に示すように何度か改正されて現在に至っている。

設立当初の会費や入会金を見ると、昭和５２～５５年までは、団体と個人での違いや、日常使えるコートがある場合とない場合、家族会員、ジュニアの個人と団体など区分が多岐にわたっていた。表には代表的な区分を載せているが、事務手続きの簡便化のため団体での申し込みをお願いしており、その見返りとして団体割引を行ってきた。平成元年から、団体と個人が同額となっているが、この時期は団体には団体

会員数に応じた補助金を出していた。

年会費４０００円をベースに協会を運営してきたが、砂入り人工芝コートへの改修に伴って使用料金８０万円を支払うことになったり、あるいは夜間照明機器を自己資金で３面増設したことなどから、平成１０年に会費を値上げしている。また、平成１０年から１５年までは夜間照明設置時の借入金を早期に返済するため、賛助会員制度を設けており、２０数名の方に１万円の会費で協力いただいた。

北見テニス協会入会金、会費の変遷

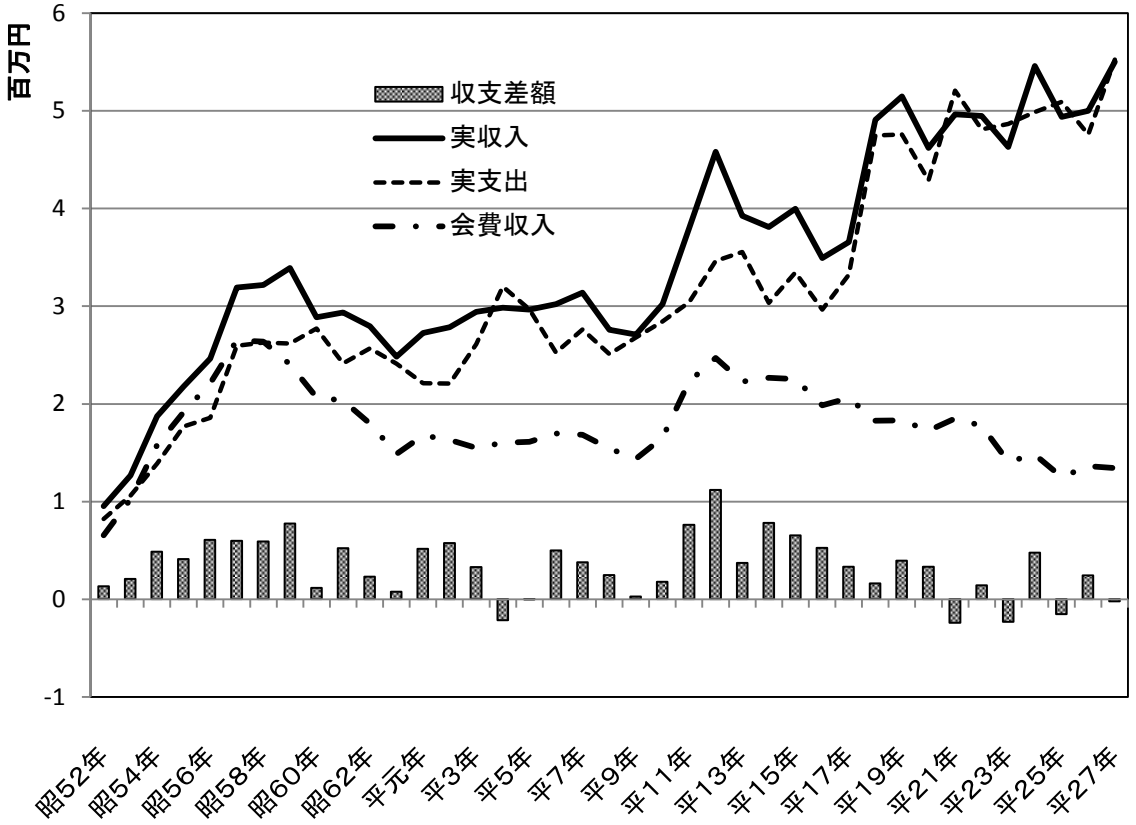
会　　費

	一般	一般	家族	大学	Jr	Jr団体
昭 52 年	4000	3500	2000	1500	1000	500
昭 56 年	4000	3000	2000	2000	1000	
平元年	4000	4000	2000	2000	1000	
平 6 年	4000	4000		2000	1000	
平 7 年	4500	4000		2000	1000	
平 10 年	6500	6000		2000	1500	
平 25 年	5000	5000		2000	1500	

入　会　金

一般	一般団	大学	家族	小中
2000	1000	500	500	500
2000		2000	2000	2000
2000		2000	2000	0
2000		2000		0
2000		2000		0
2000		2000		0
1000		2000		0

協会創立時からの全体収支をまとめたのが下図である。議案書には繰越金を含めた額が収入として記載されているが、年度ごとの収支がわかるよう、ここではその年度の実収入と実支出で整理し、収支差額を棒グラフで示している。また、協会の実質的な運営費となる会費収入（入会金を含む）もプロットしている。全体の動向としては、総収入は増加しており、余剰金の出る年度が多いが、マイナスになっている年度も何度か見られる。



北見テニス協会４０年間の収支状況

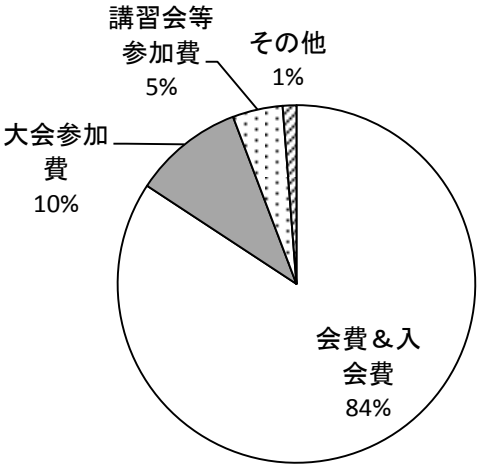
図を見ると、余剰金が多かった時期は 2 回あり、最初は会員数が急増した協会設立後の１０年間くらいで、毎年数十万円のプラス決算となり、特別会計に繰り入れている。平成になってからは会員も定着し、

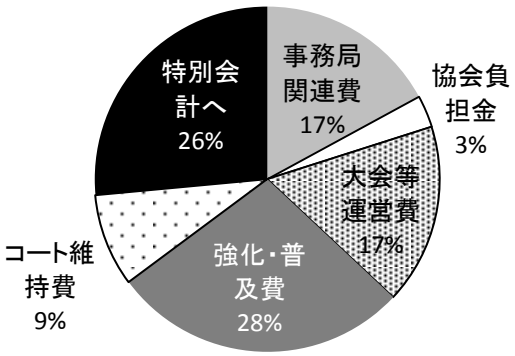
収支が拮抗していたが、コートが砂入り人工芝になった平成１０年からは会費の値上げや賛助会員制度の効果もあって、再びプラス決算が続いた。その後、ジュニアの会員数は増えたものの、一般会員が減少していることから会費収入が漸減し、この１０数年で１００万円の減額となった。その結果、マイナス決算になる回数が増えており、また、平成２５年に会費を１０００円下げているので、厳しい決算になる可能性が高まっている。

以下の図及び表は、プラス決算となった創立初期の昭和５４年の収支と、マイナス決算になった平成２５年の収支の内訳を示している。

昭和５４年では、収入の８５％が会費等収入で、大会参加費や講習会収入はそれぞれ１０％と５％程度と少ない。当時の大会参加費を調べてみると、シングルス大会４００円、ダブルス大会６００円と低く、また大会数も少なかったので収入も少なかった。設立当時は普及活動に重点を置いていたため、このような金額設定になったと思われるが、併せて、市内のスポーツ店などとの共催となった大会が多かったことから景品が豊富だったこともあって、十数万円の補助で大会運営ができている。その後の大会参加費であるが、昭和５８年に改正されシングルス５００円、ダブルス１０００円に増額しているが、大会収支をバランスさせるために、昭和６３年からシングルス１０００円、ダブルス２０００円に改正し、現在に至っている。

なお、昭和５４年の支出で強化普及費の割合が大きいが、これは、講習会の支出ではなく、都市対抗に参加するための旅費の一部を協会が負担したためである。一部補助はしているものの、都市対抗参加選手には物心両面で大きな負担をかけている。このような都市対抗補助やコート管理費、事務関係費を支出しても余剰金ができ、この年度は５０万円（正確な残高は 485894 円となるが、繰越金で調整して 50 万円とした）を特別会計に繰り入れることができた。





昭和 54 年収入

会費＆入会費	1579000
大会参加費	187000
講習会等参加費	85000
コート管理委託費	0
その他	23153
収入合計	1874153

昭和 54 年支出

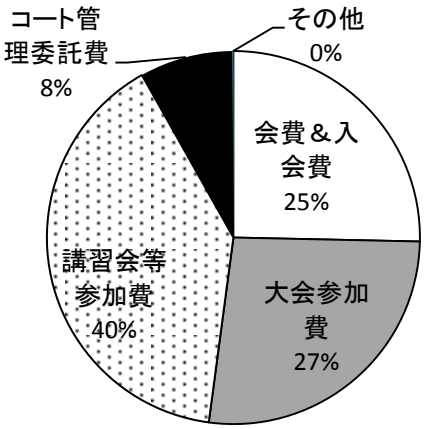
事務局関連費	322430
協会負担金	56900
大会等運営費	319000
強化・普及費	525829
コート維持費	164100
特別会計へ	500000
支出合計	1888259

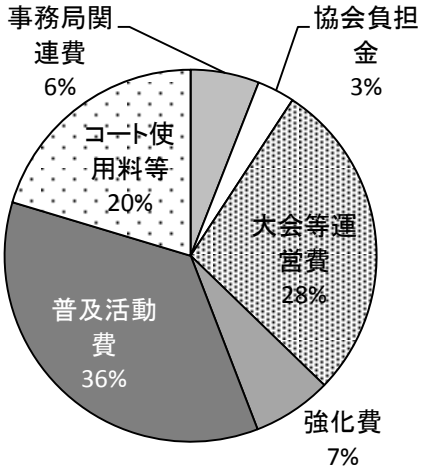
昭和５４年頃の協会の収支状況

一方、平成２５年の収支を見ると総収入は昭和５４年時の 2.5 倍に増大しているが、会費等収入は３０万円程度少なくなっている。収入が増えたのは大会参加費と講習会収入になるが、大会参加費は登録料が１０００円/1 人になり、また参加者総数が昭和５４年ころは５００数十人だったのが、平成２５年には大会数も増えて、１１００人近くに増大したためである。また、講習会参加者も昭和５４年ころは延べ人数

で６００人程度であったが、最近はジュニア教室が継続的に開催され、延べ人数で年間３０００人を超えている。講習会参加費であるが、一般の方を対象とした講習会は、当初無料とか３００円程度であったが、現在は１０００円～３０００円を負担してもらっている。近年、ジュニア（小中学生）の指導を強化しているが、安全にかつ丁寧な指導のために、指導補助者を増やしているが、これらの協力者に車代を支払うようにしたことから、受講者には毎月受講料を納入してもらっている。以上のような経緯があって、最近の大会参加費及び講習会参加費が増大しているが、いずれの事業も支出がバランスするように運営してもらっている。

収入の部にコート管理委託費というのがあるが、昭和５４年のクレーコート時代にはなかった項目である。クレーコート時代は、雪が解けると、コートの耕うん、転圧、ラインテープのくぎ打ちなど協会がコート整備全般を行っており、その対価として協会員のコート使用料を無料にしてもらっていた。砂入り人工芝コートになってからは、クレーコート時代のようなコート整備は不要となったことから、市にコート利用料を支払うことになった。４面を利用することを基本として使用料金が算定されており、現在は８０万円となっている。一方、協会としては、春のコート周辺の整備、日常の管理、ハウスの清掃、コート納めの作業などを代行することとして、市から管理委託費を４０万円支給してもらっている。結局、協会運営の基本財源である会費等収入が少なくなってくると、コート使用料などの固定的な費用とのバランスで、マイナス決算（平成２５年は１７万円程度のマイナス決算となった）となる。





平成 25 年収入

会費＆入会費	1251500
大会参加費	1322500
講習会等参加費	1961850
コート管理委託費	400000
その他	3541
	4939391

平成 25 年支出

事務局関連費	304256
協会負担金	167000
大会等運営費	1430881
強化費	352400
普及活動費	1813311
コート使用料等	1039484
	5107332

平成２５年頃の協会の収支状況

以下特別会計は省略

９．　北見テニス協会行事

９－1　各種講習会

1)　協会指導員による講習会

北見テニス協会を設立し、多くの方に協会員になってもらったが、皆さんにはテニスを生涯スポーツとして長く続けてもらうことが重要である。そのためには初心者への指導ばかりでなく、中級程度の人への講習も欠かせない。と言いながら、協会設立当初は役員の中に講習会を実施できるような経験者がいなかった。そのため、北海道テニス協会の方々に初心者の講習会をお願いするとともに、指導方法についても講習してもらい、普及活動がスタートした。そのようなひよこ講師による講習会ではあったが、おはようテニス教室、ナイターテニス教室、女性テニス教室、室内テニス教室、ジュニアテニス教室などで熱心に指導していただき、その当時の受講者の方が今もテニスを継続されているのはうれしいことである。

＜指導者養成＞　講習会での指導には多くの方に協力いただいたが、やはり一定の技術力とテニスに関する知識が必要であり、指導員資格の取得を奨励した。最初に資格を取得したのは岡氏と常本氏で、昭和５５年に取得している。取得のための講習と試験は札幌で行われ、延べ４～５日を要し、実技と筆記試験を受け日本テニス協会指導員２級の資格を得ている。２人に続いて、昭和６２年には因芳広氏、伊藤直人氏、昭和６３年に時任重興氏が取得している。また、日本体育協会にもテニスの公認指導員制度があり、この資格試験が昭和５８年に北見市で実施され、時任重興氏、大島俊之氏、伊藤陽司氏、藤池保夫氏、池端治雄氏、元村勲幸氏、新井歌子さん、伊東定子さん、小川政子さんが取得した。平成７年頃に指導員資格制度の見直しがあり、普及・育成に重点を置いた公認指導員の認定は日本体育協会に統一された。上記以外の人で資格を取得した方、転勤してきた方で指導経験者の方々にも指導に取り組んでもらっていたようだ。なお、指導員資格は有効期間が４年間であり、更新には札幌等に出向き一定の実績を積むことが必要なことから、継続している人は少ないのが現状である。

当時のスポーツ指導員の登録証

＜一般向け講習会＞　初級・中級向けの講習会としては、おはようテニス教室、ナイターテニス教室、そして冬期に行われる室内テニス教室がある。なお、女性テニス教室については、女子連の活動の中で触れることにする。

協会設立当初、おはようテニス教室は人気があり、早朝にもかかわらずコートハウス付近に黒山の人だかりができていて驚いた記憶がある。記録に残る中で一番受講者が多かったのが昭和５７年で、延べ８００人も参加している。早朝６時から７時３０分までの講習を連続６回で実施していたが、１日１３０人以上の受講者が集まったことになる。これらの受講者を数名のコーチで指導するのだが、コート１面に３０人近くが入り、まさにすし詰め教室であった。できるだけ均一な指導ができるよう、指導方針やその日のメニューをコーチに事前に渡して実施するのだが、クラス分けはしているものの、個人差が大きいのでコーチは苦労したと思う。また、受講者も球に触る機会が少なく満足感が低かったのではないだろうか。おはようテニス教室はその後も多くの受講者があったが、平成１０年ころから受講者が１０名程度のこともあり、平成１８年には受講申し込みがなかったこともあって、その後中止となっている。

ナイターテニス教室も人気があった。当初は年１回の開催であったが、ナイター設備が６面に増設された昭和５９年から年２回開催している。この頃が受講者の多い時期で、延べ７００人程度が受講しており、１９時から２１時までコートは熱気に包まれていた。最近は受講者が少なくなっており、年１回の開催となり、受講者も１０数人のこともある。１９時のスタートなので、コーチも受講者も、職場から直行する人も多かったと思うが、職場でのストレスの発散ができ、また一汗かいた後のビールも楽しめたのではないか。

室内テニス教室は道立体育館のコートを使って行っている。屋外とは異なり、床面ではボールが早いので初心者には難しい条件であるが、多くの方が参加している。北見市には網走や釧路のような室内コートがないが、市立体育館や道立体育館がテニスに開放されており、講習会の開催や冬季の練習に利用できる。

室内テニス教室も年２回開催した時期もあったが、最近は受講者も少ないことから年１回になっているが、冬場の運動不足の解消には良い機会になっている。

＜ジュニア向け講習会＞　記録を見るとジュニア向けの講習会は昭和５６年から始まっている。当時は小学生が中心で、２日間程度の講習会であった。受講者の親から継続的に指導してほしいとの要望もあり、希望者を集めて指導していたこともあるが、中学生になると他の部活を始めるため継続できないことを経験している。そのようなこともあって、平成になってからしばらくはジュニア講習会は開催されなかった。ジュニア育成の課題はテニスの面白を知り、継続してもらうことにあり、平成１７年ころから「Tennis Play & Stay」システムが導入されている。この指導法は、子供の成長に合わせ、ラケットの大きさやボールの硬さ、ネットの高さを変更し、早い段階から試合を経験できるようにしたものである。平成１８年ころから本協会でも捧氏がこの方式での指導を始めており、それ以降、小中学生への講習会が継続されるようになった。

数年前からは、小中学生の受講者を初中級、上級、育成クラスに分け、女子連の協力も得て年間を通して指導する体制をとってもらっている。受講者の延べ人数は年間３０００人を超えており、そのような努力が実って、北見ばかりでなく他都市の大会にも出て勝ち上がる選手も増えてきた。

北見の現状を見ると、小学生と高校生のテニス人口が増えてきたが、中学生が増えない。その理由は中学校にテニス部がないためで、協会としては、テニスを中体連の正式種目に認定してもらい、部活動と同等の扱いになることを目指している。そのため、北海道テニス協会の活動に呼応し、北見地区中学校テニス団体戦を北見市教育委員会やオホーツク地区中体連の後援を得て進めている。幸い、平成２７年から札幌で開催される全道中学校テニス団体戦大会に参加できるようになった。また、平成２８年の北見地区大会では、市内の東陵、南、北中学校と遠方の斜里中学校からも参加があったが、さらに多くの中学校でテニス愛好者が増えることを願っている。

平成２８年度から始まった北見教育委員会主催の「Jr アスリートチャレンジアカデミー」事業にも参加し、７０名近い小学生にテニスの楽しさを体験してもらった。フィジカルトレーニングとテクニカルトレーニングの詳細なプログラムを作って、２日間指導してもらったが、指導方法や指導者の配置など、教育委員会からも高い評価を得た取り組みであった。

Jr アスリート講習の一コマ

2）プロ選手や外部指導員による講習会

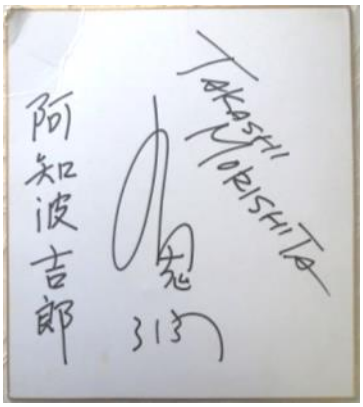
協会の発展は会員の熱意がまず第一であるが、それを支援してくれる周囲の環境も重要である。北見市や北見市体育協会の支援もあったが、市内のスポーツ店の協力も大きかった。４つの市内スポーツ店（茂藤スポーツ、クマザキスポーツ、コンスポーツ、阿部スポーツ）との共催大会が開催されているが、さらに、スポーツ店の支援を受け有名選手やプロの指導者による講習会が多く開催されている。そのほかにも、朝日生命とか東急デパートがプロ選手や指導者を招いてくれており、まとめてみるこの４０年間で述べ５０人以上の方々に講習会を開催してもらっている。

＜道テニス協会後援講習会＞　協会設立初年度と翌年は、北海道庭球協会（当時の名称）から強化指導部や役員の方に来てもらい講習会を開催している。初年度は市のコートが使えなかったため、北見工大のコートで実施したが、４日間の講習会に５人の指導者（葛岡、渡辺、八木、本田、芹沢）を交代で派遣してもらった。翌年は強化指導部長の小山先生（当時、北大の法学部長）と女子北海道チャンピオンの沢田さんが来ている。これらの方々は、北海道テニス協会の運営上の重鎮でもあり、その後もテニス指導者の資格審査や、審判員の資格審査などでお世話になった。北見に来られる場合、道協会から旅費の支援があったが、ボランティア精神で指導に当たってもらっており、道協会役員の普及活動にかける思いが伝わった。

＜カワサキ後援講習会＞　昭和５３年に来北した北村プロは、カワサキラケットの専属で、(株)茂藤スポーツが呼んでくれたように記憶している。カワサキは軟式ラケットで有名であったが、いち早くグラファイト系の硬式用ラケットを開発している。グラファイトルーラーというラケットで、この宣伝も兼ねて講習会が開かれたと思う。

＜ダンロップ後援講習会＞　ダンロップと美津濃の講習会は(株)クマザキスポーツの支援を得て実施している。ダンロップに派遣してもらった蝶間林氏は横浜国大の先生で、日本デビスカップチームのトレーナーもされていた。北見の食べ物や川湯付近の温泉に魅かれてのか、３度も来ていただいた。蝶間林氏は現在も横浜でテニス Labo を運営されており、また、「科学の目で見たテニスレッスン」などの著書もあり、最新のテニス指導方法を実践されている。

＜美津濃後援講習会＞　美津濃(株)がラケットの宣伝のため、全国で講習会を開催していることがわかり、クマザキスポーツにコーチ派遣を依頼した。なんと、世界ランカーの九鬼氏が来ることになりびっくりした。昭和５５年に全日本で優勝、翌年ＡＴＰに参戦し、ＡＴＰランキング７４位になっている。まさに現役バリバリの世界ランカーに指導してもらえることと、知名度の高さから多くの受講者で盛り上がった。記憶に残る一言を今でも記憶しているが、「テニスの打法は８の字を描くのが基本である」と教えていたことである。当時、北見テニス協会では、ストロークの基本はラケットを早く引いて打ち出すと教えていたので戸惑った。すぐには九鬼方式に移行できなかったが、最近の若い人のストロークを見ると九鬼氏の打法に近いかもしれない。九鬼氏も２度来北されている。昭和２０年生まれであるが、現在もジュエ・インドアスクールの校長としてジュニア等の指導をされている。九鬼氏の後、美津濃専属の加藤プロや古橋プロが継続して来北してるが、古橋プロは昭和５５年の全日本テニス選手権女子の優勝者であり、加藤プロは昭和５２年のデ杯選手と、そうそうたるメンバーであった。



九鬼氏と同行者のサイン

＜朝日生命後援講習会＞　朝日生命テニススクールは、スポーツで健康な体を作ることを支援する事業として、各地でテニススクールを開催していた。要は、病気もせず元気でいてくれることが保険会社にとってもメリットが大きいということのようだ。普通、遠方まで指導に来てくれるのは１～２人であるが、なんと５人ものスタッフに指導してもらった。その一人である内山氏は昭和５５年の全日本の男子ランキングのトップであり、川口氏や鷲田氏もランキング１０位以内の選手であった。当協会会員の中に朝日生命勤務の方がいて、このような豪華なメンバーによる講習会の機会を作ってもらったと思うが、事前の宣伝も功を奏し、１２０人もの受講者が楽しく指導を受けていた。

朝日生命テニス教室

＜ウインザーテニス後援講習会＞　昭和６０年頃の北海道テニス協会副会長は衆議院議員の中川昭一氏であった。東大時代からテニスをされており、国会議員をしながら暇を見つけては議員仲間や皇族の方などともテニスをされていたそうだ。選挙区は十勝なのでオホーツク圏は票田ではないが、新宿の大手スポーツ店であるウインザーテニス(株)との共催での親睦大会と講習会を開催してもらった。講習会講師は全日本のランカーであった田辺兄弟で、中川氏に同行してきて指導してくれた。平成２年から数回開催したのだが大会結果記録は残っていない。雨で大会はできなかったが、北見工大の体育館を借りて交流試合をしたこともあった。また、前日雨が激しかったので、あきらめて飲みすぎた中川氏であったが、翌日のコート整備に驚きながら親睦試合を楽しんでいた。懇親会を開催したこともあるが、普段聞けないようなオフレコに近い政治や皇室の裏話もされており、豪華景品よりその方が思い出深い。中川氏は、財務大臣や農林水産大臣なども歴任され、将来の総理候補でもあったようだが、残念ながら、平成２１年に心筋梗塞で帰らぬ人となった。

前列左３人目が中川氏、４，５人目が田辺兄弟

＜ＮＴＴ後援講習会＞　北海道にはテニスの実業団チームが何社かあるが、ＮＴＴ北海道が活躍していた。

会社が社会貢献事業としてコーチの派遣を行っていることがわかり、札幌に転勤した当協会員を通して講習会の開催をお願いした。ナイターでの講習会や女性向けの講習会を２回開催してもらった。

＜東急デパート後援講習会＞　北見唯一のデパートである東急デパートが平成４年に開店１０周年を迎え、それを記念して東急レディーステニス大会を開催してくれることになった。道内で３か所目になるが、それに合わせてテニスクリニックも計画してもらった。講師は岡川恵美子さんで、昭和５７年、平成２年に全日本テニス選手権で優勝しており、ＡＴＰツアーにも参戦しているトッププレーヤであった。全日本 Jr 監督の松原さんも同行されており、２人に指導してもらったが、この大会に合わせ岡川プロは３度足を運んでくれている。暑い東京を離れられるので楽しみにしていたようだ。また、当協会３０周年記念の講習会にも来てもらったので、都合４回の来北になり、最も多く北見に来られたプロ選手である。

＜自主開催講習会＞　平成１３年から網走テニス協会が賞金の付いたオホーツクオープンテニス大会を開催することになり、日本のトップクラスの選手が参加していた。その一人に平成３年、４年の全日本選手権の覇者の山本氏がいた。網走協会から講習会開催の打診があり、平成１６年に北見でも実現している。さらに、平成２０、２１年にも来てもらっているが、ジュニアの指導で活躍している福永氏を同行されており、ジュニアや一般を対象に熱心に指導されていた。

北見に大手のスポーツ店が進出してきたため、地元のスポーツ店はその影響を受け、プロ選手による講習会の後援が難しくなった。そんな状況であったが、平成１９年に当協会が創立３０周年を迎えるので、その記念事業の一つとしてプロ選手による講習会を企画した。これまでのつながりの強い岡川プロにお願いして４人の方に来てもらっている。岡川さんをはじめとして、皆さん日本のランキング上位の方で、４大大会にも参戦した選手である。特に平木理化さんは平成９年の全仏混合ダブルスで優勝するなど、ダブルスのトッププレーヤーである。基本的な講習の他、４人による模範試合や受講者との交流試合なども行ってもらった。

網走・北見テニス協会「山本育史プロのテニス教室」

プロの指導を受けてみませんか

「山本育史プロのテニス教室」

網走でのテニス教室は4日(金)午後1時30分～3時と5日(土)午後2時30分～4時の2回、北見では5日(土)午前9時～正午の1回行われ、初心者から上級者に分かれて、直接山本育史プロから指導してもらえます。

参加ご希望の方は、網走は当日直接会場での受付、北見は事前にコートハウスの申込書に記入受付となります。参加料は無料ですが、網走で参加する場合はコート使用料３７０円が必要です。

プロの指導を直接受けるめったに無い機会なので、ぜひプロのテニスレッスンに参加してみてはいかがですか。

網走テニス協会と北見テニス協会では、7月4日(金)・5日(土)の2日間(北見は5日のみ)、網走スポーツ・トレーニングフィールド(網走市呼人)と東陵運動公園の両会場で「山本育史プロのテニス教室」を開催、ただいま初級者から上級者まで参加者を募集中です。

山本プロは91・92全日本選手権を2連覇した後、'91～'95までデビスカップ日本代表として、松岡修造選手とともに日本チームを支えた一人でもあります。

お問い合わせ
網走テニス協会
(網走市保健センター内)
TEL.0152-43-8450(法田まで)
北見テニス協会
TEL.090-6447-7700(林まで)

山本育史プロの講習会

左から吉田、岡川、吉田、平木プロ

＜体育協会等との共催講習会＞　当協会主催の室内講習会は協会指導員が毎年行っているが、プロの指導者にお願いしたことがなかった。北見市体育協会が講師を招いての講習会を支援していることがわかり、著名な指導者である小浦武志氏にお願いをして冬季の室内講習会を企画した。小浦氏は伊達公子さんをジュニア時代から育てた方で有名であり、また、キッズテニスの発案者でもある。幸い、３年間続けて補助事業に採用してもらえ、高校生の上級者に対する練習方法の指導とか、指導者層のコーチング方法などについて指導を受けた。

最近の講習会であるが、平成２７年１２月に道立体育館をテニスの日として１日開放してくることになった。急なことであったが、強化普及部と検討し、ジュニア講習会を開催することにした。早速、北海道テニス協会にコーチの推薦をお願いしたところ、北広島市で「テニスＰＯＴＡ」を運営されている長谷川洋一郎氏の推薦があった。長谷川氏は大学時代はインカレでも活躍した方であるが、北海道に戻ってジュニア等の指導に取り組んでいる方である。当日は、小中学生の部と高校生の部に分けて指導いただいたが、

北海道メディカル・スポーツ専門学校の講師の方を同行され、コート３面を使ってフィジカル面とテクニカル面の指導をユーモアを交えながら、しかも厳しく教えていただいた。受講者の好感度も高かったことから、平成２８年の北見市体育協会の補助事業に申請し、砂入り人工芝コート改修記念テニス教室として採択してもらった。前日から一部の方に指導方法の基礎を教えてもらい、翌日の球出しなどの補助に当たってもらった。当日は北見入りした北海道メディカル・スポーツ専門学校の講師と学生数名がきめ細かなフィジカルトレーニングを実施し、７面を使っての指導は見事であの満足度も高かったと思う。

長谷川洋一郎氏による練習方法指導

当協会の講習会に来北されたプロの選手など

年度	外部からの講師氏名
昭５２年	道テニスり、受講者協会講習会（葛岡、渡辺、八木、本田、芹沢）
昭５３年	北村元延プロ講習会（カワサキ）、道テニス協会講習会（小山昇、沢田久美子）
昭５４年	蝶間林利男（デ杯コーチ）ダンロップテニス教室、九鬼潤プロ講習会（美津濃）
昭５５年	朝日生命テニススクール（内山悦男、細野明角、川口晶、横澤重信、鷲田則之）
昭５６年	加藤幸雄プロ講習会（美津濃）、蝶間林利男（デ杯コーチ）ダンロップテニス教室
昭５７年	九鬼潤プロ講習会（美津濃）
昭５９年	蝶間林利男（デ杯コーチ）、熊本昌宏（ダンロップテニス）
昭６２年	古橋富美子、加藤幸夫（美津濃）プロテニス教室（日本選手権優勝、準優勝）
昭６３年	加藤幸夫プロ講習会（美津濃）
平２年	田辺清、正兄弟によるプロテニス教室
平３年	田辺清、正兄弟によるプロテニス教室
平４年	高木氏（ＮＴＴ）、小原氏（ＮＴＴ）のナイターテニス講習会
	岡川恵美子プロ（東急）、松原慶子（全日本Ｊｒ監督）テニス教室
平５年	辻氏（ＮＴＴ）、宮尾氏（名古屋）のナイターテニス講習会
平７年	岡川恵美子、野村　勉（東急）プロテニス教室
平８年	岡川恵美子、野村　勉（東急）プロテニス教室
平１０年	東急レディーステニス教室
平１５年	ルール講習会（ＪＴＡ　姫井義也）
平１６年	山本育史（ダイワ精工）講習会
平１８年	田辺、溝口プロによるマナーキッズテニス教室
平１９年	３０周年記念プロテニス講習会（平木理化、岡川恵美子、吉田友佳、宮内美澄）
平２０年	山本育史（プリンス）講習会、福永二郎（アメアスポーツ）講習会
平２１年	山本育史（プリンス）講習会、福永二郎（アメアスポーツ）講習会
平２２年	小浦武志テニス講習会
平２３年	小浦武志テニス講習会
平２４年	小浦武志テニス講習会
平２７年	長谷川洋一郎ジュニアテニス講習会
平２８年	長谷川洋一郎テニス講習会

９－２　会員交流行事

テニスコートで汗を流しているのは、健康のためとか仲間との交流を深めるためといった方が多いと思うが、やはり試合を通して一球一打に歓喜するためでもある。初心者とか体力に自信がなくなった人など、ポイントの対象となる公式の試合に出るのにためらいがある人でも、気楽に参加できるよう企画したのが

お楽しみテニス大会やクラブ対抗戦などである。

1）お楽しみテニス大会

協会が設立された翌年からコート開き、コート納めと併せて、親睦を兼ねた紅白戦が行われていた。抽選で紅組と白組に分かれ、主将はペアーやオーダーを考えて対戦に臨み、勝敗数で勝利を決める。勝組には賞品が当たったと思うが定かではない。紅白戦の夜には懇親会を行って交流を深めていた時期もあった。

お楽しみ大会となったのは平成７年からで、女子連がやっていた「お楽しみ女性テニス大会」を見習って、紅白戦とは別に夏と秋に行っていた。当初は個人戦で、Ｂクラス及びＣクラス、壮年、混合のダブルスで一般大会と同様に優勝者を決めていた。もっと幅広く参加してもらえるようにするために、平成１６年頃から夏はチーム戦に変更している。なお、秋は混合ダブルス戦を実施していた時期もあったが、夏と同様の形になったのは１０年前くらいからのようだ。

現在は、春のコート開きに併せて行われる「テニスフェスティバル＆お楽しみ大会」が最初である。この大会には会員外も参加ができ、しかも入会する場合は入会金が無料となる特典付きである。毎年数１０名が参加しているが、簡単な講習会を行った後に、初級、中級、上級にクラスを分けてチーム戦を行っている。クラスは自己申告を尊重し、男女関係なしのダブルスの対抗戦となるが、参加費無料で、豪華（？）賞品もあたるので参加者も多いようだ。平成２８年のこの催しでは、砂入り人工芝コート全面改修を記念して、札幌からプロの指導者である長谷川洋一氏を招き、フィジカルトレーニングやテニスの基本的練習方法を学んだり、試合での戦略などについて講習をしてもらった。

参加者募集のポスター

秋のお楽しみ大会は「テニスの日記念お楽しみテニス大会」になる。平成１０年に日本テニス協会がテニスの普及のために設けた記念日で、９月２３日の秋分の日に全国のテニス協会で普及活動を行うことになった。当協会もその趣旨に賛同してお楽しみ大会を開催している。混合ダブルス戦を行ったときもあったが、現在はチーム戦になっている。チームメンバーは当日発表され、老若男女入り乱れたペアーでのチーム戦であり、名前も知らない者同士がペアーを組むなど、良い親睦の機会になっている。もちろん、お弁当も用意されており、全員に賞品が当たる。

最後のお楽しみ大会はコート納めの前週に行われれる「紅白・納会テニス大会」である。個人で申し込みができ、先のテニスの記念日と同様、にわかチームを作りじゃんけんでペアーを決めるなど、まさに親睦のための大会と言える。順位は決めるが、優勝したチームが良い賞品をもらえる訳ではなく、選択の優先権があるだけなので、賞品袋を開けるまで勝負が続く。１１月３日の休日に開催することが多いが、なんと、平成２８年は午後から雪になり、当協会初の雪中テニス大会となった。コートも真っ白になったが、ボールも白く見え、雪合戦のようだった。北見の初雪の時期としては異例の速さであるが、その後に降った雪が３０ｃｍを超えており、まさに異常な大雪だった。

雪の中の紅白・納会試合

2）クラブ対抗戦

協会が設立された年から職域・職場対抗戦が開催されている。当時副会長であった鎌田氏（北見塗装社長）、大野氏（北見工大教授）、泉氏（北糖所長）の３氏から優勝旗の寄贈を受け、優勝旗争奪戦としてスタートした。しかし、職場・職域と限定すると参加にためらいのあるチームもあり、昭和５９年からはクラブ対抗戦となり、主として団体登録したグループでチームを作って参加している。平成６年くらいまでは議案書に記録が残っており、北見工大チームとグランドスラムチームの優勝回数が際立っていた。しかし、このころからスポンサー付きの大会が増え、日程に余裕がなくなったためか平成８、９年には開催されていない。

平成１０年のテニスの日に再開され現在も継続しているが、今では当協会行事の中で最も参加者の多い交流大会となっている。そのきっかけは、お昼に焼肉パーティーをするようになってからではないかと思う。公園内は火気厳禁なので、温水プール裏の温水パネルの隙間を利用して１０数チーム、１００人近い仲間が焼肉を突っついていた。煙が舞いあがり、笑い声の絶えない楽しい時間であった。平成２７年に温水プールの取り壊しによって焼肉ができなくなったが、参加チームは減ることがなく、優勝チームに与えられるビールなどを目指して激しい応援合戦が繰り広げられている。

初期のクラブ対抗パンフ

焼肉パーティーに一段と盛り上がる

3）忘年会

もう一つの会員交流の場は忘年会である。協会設立時は参加者も多く、ホテルを会場として実施したり、ボーリング大会の後に行ったりしたこともあった。テニスコートでは利用時間帯が違っていたり、大会に出ることがない人なども忘年会に参加していて、いろいろな人と交流できる機会になっている。ただ、職場などの忘年会が優先となるため、参加者が少なくなっているのは残念なことである。担当者がいろいろ工夫してくれており、ビンゴゲームやくじ引き、あるいはじゃんけん大会などで皆さんに素敵なプレゼントを用意してくれている。ぜひ、多くの方に参加してもらいたい。

平成２８年忘年会と豪華賞品

１０.都市対抗テニス大会

当協会が選手団を編成して派遣している対外試合には、北海道都市対抗テニス大会と道東都市対抗（後に北北海道都市対抗と改称）テニス大会がある。これらの大会の概要を以下にまとめてみた。

１０－１　北海道都市対抗テニス大会

対外試合の代表である北海道都市対抗デニス大会へは、当協会が設立された昭和５２年に札幌市で開催された第２８回大会から出場している。この頃の大会はＡクラス男子チーム、Ｂクラス男子チーム、女子チームで参加できるもので、北見市はＢクラス男子チーム（男子ダブルス３ペア：斉木、佐々木、岡、常本、伊東、鶴原）のみで出場した。戦績は小樽市・留萌市・北見市の３都市からなるＡブロックリーグ戦で留萌市には３勝したものの、小樽市には２分け１敗であり、ブロック２位となって決勝リーグに駒を進めることはできなかった。しかし、昭和５２年１月末に設立総会を終えたばかりで、コート条件なども整っていない中、５月末の大会へ選手団を派遣し、しっかりと戦績を残していることに驚くばかりである。昭和５３年の第２９回大会は函館市での開催で、遠距離であったためであろうか欠場しているが、第３０回以降の大会へは選手団を編成して、欠かさず出場してきた。

＜１部都市への挑戦＞　この大会への参加都市が増えたことで昭和５５年の第３１回大会からは１部都市と２部都市に分かれての対戦となり、翌年の大会で１部最下位都市と２部優勝都市で自動的に入れ替わるという方式になった。この第３１回大会では２部に出場した北見市は室蘭市に次いで２位であったが、事前の北海道協会の説明が不明瞭で、２部上位２都市が１部下位２都市と入れ替わるものと理解していて、翌年は１部昇格と大喜びしたことがあった。しかし、１部－２部の入れ替えは１都市のみという通知があり、北海道協会とずいぶん熱いやり取りをしたが、結局１部への昇格は叶わず昭和５６年の第３２回大会は２部出場となった。しかし、第３２回大会では前年の悔しい思いが力となって２部優勝を果たし、昭和５７年の第３３回大会には１部に出場した。その後も１部残留あるいは惜しくも２部降格となってもすぐに１部へ返り咲く状況を１４年間続け、エスカレーター都市と言われたこともあった。それだけにエピソードも多い。６－１の岡会長の紹介のところで触れたが、翌日の対戦相手を甘く見て、前夜祭で飲みすぎ１部昇格を逃した第３５回函館大会、また、帯広での第３７回大会ではオーダーミスにより、ブロック最下位になり１部昇格は難しいと思われたが、翌日の最下位決定戦で強豪小樽市を破って、土俵際から一部残留を決めた大会もあった。４０回の参加の中での最高順位は全道３位である。平成３年の第４２回大会では岡氏が病気治療中で戦力的に厳しかと思ったが、ブロックでは札幌に負け２位となったものの、順位

地獄と天国を経験した昭和６１年帯広大会

全道第３位となった平成３年の大会

決定戦では千歳に勝ち３位となった。一方、最も厳しかったのは第５５回旭川大会である。４部に降格してしまい１部を目指した挑戦が始まった。会報５８号に監督福田氏が顛末記を載せているが、留萌との決勝戦を４対１で快勝し、胸をなぜおろしたそうだ。このように大会では一喜一憂を経験しているが、レセプションになると、北見はいつもブレークして会場を盛り上げていた。

１部の対戦は一般男子ダブルス４ペア、45 歳以上男子ダブルス１ペア、一般女子ダブルス２ペアで勝ち抜く必要があり、選手層が十分ではない状況にありながらも、全道レベルの大会で上位の戦績を残す選手を数多く擁する道央の都市と互角に戦っていたと評価できよう。なお、現在の１部対戦は、一般男子２ペ

ア、一般女子２ペア、４５歳以上男子１ペア、４５歳以上女子１ペア、５５歳以上男子１ペアとなっており、高齢化に対応したチーム編成となるが、北見に有利かどうか一度挑戦したいものだ。

２３日日曜日、優勝決定戦において、留萌市と対戦し、４－１で快勝し、４部優勝を果たすことができました。数年前までは、１部・２部で出場していたことを考えると４部優勝で喜んでいる訳にはいきませんが、本年の最低限の義務は果たしてきたかなというのが実感です。

至らない監督ではありましたが、今回の優勝は、選手の皆さんそれぞれのがんばりと北見市の固い団結及び降雨によるゲーム縮小という運も味方していたかもしれません。今後、来年（帯広市）での２部昇格を新たな目標として強化練習や若手の育成などを図っていきたいと思います。最後になりましたが、大会に送り出してくれました
協会役員に皆様や強化練習で協力していただいた
協会員の皆さん、及び旭川まで応援に駆けつけてくれた
方々に厚くお礼申し上げると共に深く感謝申し上げ、
大会結果報告といたします。

選手のみんな、ほんとーにお疲れ様でした。
（強化部　福田　哲也）

４部での厳しい戦いが会報に載る

懇親会ではいつも元気いっぱい

＜派遣選手層＞　協会設立当初より、北海道都市対抗大会への派遣選手になることは憧れであった。これらの人は技術力・競技力が優れ、協会内の大会で常に上位の戦績を残していることだけではなく、シーズン初めのコート造成、シーズン中の大会運営や講習会などにも快く応じてくれた方でもあった。当時は講習会への参加者が早朝、ナイター問わず５０名～１００名の規模で、３～４面のコートを使用しての講習会を開催していた。ボール出しなどには派遣選手が総出で、ボランティアで担っていた。派遣選手は対戦や強化練習を通じて得た技術やちょっとしたコツを伝えようと一生懸命であったし、受講者もそれらを会得しようと熱心で、協会全体として「会員の良い関係」が底流にあったように思われる。

平成１１年の第５０回大会では残念ながら１部最下位となり、翌年の大会以降２部や３部での出場が続いている。これにはさまざまな要因が挙げられようが、派遣選手確保という面では①転勤してきた選手に頼ることが大で、転入時には戦力アップもあるが、数年後の転出による戦力ダウンが不可避である、②転勤してきた選手も４月に移動してきて５月下旬に休暇を取っての出場が難しい、③大会日程が市内小学校の運動会と重なっている、などがある。昨今はどの都市も、とくに地方の市町村にあっては協会会員の減少、協会運営の弱体化、選手の高齢化などで出場が困難になってきているようであるが、当協会にあっては出場のメリットを今一度確認し合い、１部での対戦へと飛躍できるよう期待している。

＜全道大会の開催＞　北海道都市対抗テニス大会については出場だけでなく、「３－３　創立２０年～３０年の概要」でも記しているように、平成１２年の第５１回大会の北見市・網走市開催が思い起こされる。前年の第５０回大会時に選手団とともに視察員も派遣して大会運営方法を確認したり、逆に北見へ北海道協会から役員やレフェリーに来ていただいて細部（例えば、ネットの下に隙間ができないようにセンターストラップを留めるなども）を打ち合わせしたりしながら準備をし、北見市と網走市の両コートでの大会であることから６０名を超える実働役員を当協会の会員の方々に担っていただいて開催を迎えた。参加都市４４都市、参加選手は約８００名となり、５月２６日：代表者会議（道立北見体育センター1 階講堂）、５月２７日：１部～３部ブロックリーグ戦（北見市東陵運動公園テニスコート）、４部・５部ブロックリーグ戦（網走市スポーツトレーニングフィールドテニスコート）、開会式・懇親会（オホーツクビアファクトリー）、５月２８日：順位決定戦（北見市東陵運動公園テニスコート）、閉会式をやり遂げた。この大会成功は、集う会員と協会の運営体制が全道でもトップクラスであることを示していると言っても過言ではないと今でも思っている。

前日のキャップテン会議（中央宮野さん）

北見の応援風景（ユニフォームを作った）

また、この時の大会プログラム（ｐ○参照）には会員の愛犬も応援している微笑ましいページ（掲載は有料だった）も設けられ、これは後の他都市の大会でも取り入れられたように記憶している。

１０－２　道東都市対抗テニス大会・北北海道都市対抗テニス大会

＜参加都市の拡大＞　網走市では北見市よりも早く、開発局などへの転勤者を中心に網走テニス協会が活動しており、昭和５０年頃、北見工業大学や北海道糖業㈱の方々に交流試合の申し入れや大会へのお誘いがあった。それらが昭和５２年１月の北見での協会創立の契機となったが、この交流試合の輪を広げ、昭和５６年７月１２日、北見市、網走市、釧路市そして中標津町の代表選手が網走市に集って第１回道東都市対抗（道東４都市対抗と称していた）テニス大会が開催された。昭和６２年の第６回大会から紋別市が加わって５都市対抗となり、開催地も５都市の持ち回りとなったが、紋別だと釧路圏からの移動が大変なので、結局、北見、網走、釧路でローテーションすることになった。

オホーツク圏においても硬式テニス協会の設立が進み、道東都市対抗テニス大会への参加希望も増え、斜里町、美幌町、小清水町、遠軽町、女満別町（大空町）、別海町や根室市など近隣市町の協会が参加するようになった。さらに、十勝地区からの参加希望もあり、運営上の都合もあって、平成１８年の第２３回大会からは北北海道都市対抗テニス大会と改称し、最近では１１の都市・チームの対戦となっている。なお、平成１５年の２０回大会は北見で開催したが、夜の懇親会を開催しており、遠くの市町村の方は一泊されたようだ。

＜対戦成績＞　この大会の戦績は第１回大会から平成８年の第１４回大会まで北見Ａチームが連続優勝を記録している。しかし、北海道都市対抗テニス大会でも１部から２部へ降格となり、その中での対戦成績も厳しい状況になっており、また、残念ながらこの大会でも優勝から遠ざかるようになった。北海道都市対抗テニス大会への出場も含めて、協会の若手強化について派遣選手の意見も聞きながら再検討する必要があるようだ。

円陣を組む平成 28 年チーム

＜試合形式など＞　本大会は、当初男子４ペア、女子３ペアでの対戦だったため、小さな都市では選手がそろわないことから他都市に助っ人をお願いすることがあった。現在は男子３ペア、女子２ペアの対戦となったが、都市間の懇親の機会でもあり、今でも選手資格には柔軟な対応をしている。大会要項を見ると、大学生は認めていないが、地区協会会員と関連のある方は認めている。また、平成４年の第１０回大会からは選手の強化育成もあって１都市２チームの出場も可能としたり、平成１６年から平成２２年までは、１部と２部にクラス分けしたこともある。現在は、開催都市は２チーム登録できるようにしているが、２部制については意見が分かれていて採用していない。

それにしても雨に見舞われる大会で、これまで雨で３回中止となっており、雨の中で試合をしたことも何度かあった。平成２４年の北見での大会では、美幌と北見の決勝戦は雨の中で行われ、雨のためか、助っ人が強すぎたのか、美幌に負けて準優勝であった。平成２８年、２９年は北見開催であったが、平成 28 年も雨で一時中断している。当番都市の大会運営委員の方は、朝の５時の時点で実施か中止の連絡をしなければならないので、毎年天気予報と睨めっこしながら頭を痛めることが多い。

平成２８年パンフレット
（伊藤事務局長デザイン）

全道都市対抗、北北海道都市対抗での戦績一覧

北海道都市対抗テニス大会

回　数	年　度	開催都市	1部	2部	3部	4部
第28回	昭52年	札幌		2位		
第29回	昭53年	函館	欠場			
第30回	昭54年	小樽		3位		
第31回	昭55年	帯広		2位		
第32回	昭56年	旭川		優勝		
第33回	昭57年	札幌	6位			
第34回	昭58年	千歳	8位			
第35回	昭59年	函館		2位		
第36回	昭60年	小樽		優勝		
第37回	昭61年	帯広	7位			
第38回	昭62年	旭川	7位			
第39回	昭63年	江別	4位			
第40回	平元年	旭川	4位			
第41回	平2年	江別	7位			
第42回	平3年	江別	3位			
第43回	平4年	江別	6位			
第44回	平5年	旭川	8位			
第45回	平6年	江別		優勝		
第46回	平7年	江別	8位			
第47回	平8年	江別		3位		
第48回	平9年	旭川		5位		
第49回	平10年	苫小牧		優勝		
第50i回	平11年	江別	8位			
第51回	平12年	北見		3位		
第52回	平13年	帯広		4位		
第53回	平14年	札幌		7位		
第54回	平15年	札幌			7位	
第55回	平16年	旭川				優勝
第56回	平17年	帯広			6位	
第57回	平18年	札幌			優勝	
第58回	平19年	札幌		8位		
第59回	平20年	札幌			優勝	
第60回	平21年	札幌		8位		
第61回	平22年	札幌			3位	
第62回	平23年	帯広			2位	
第63回	平24年	旭川		6位		
第64回	平25年	江別		7位		
第65回	平26年	江別		4位		
第66回	平27年	旭川		6位		
第67回	平28年	江別		5位		

道東都市対抗及び北北海道都市対抗テニス大会

回　数	年　度	主管都市	北見A	北見B	都市数
第1回	昭56年	網走	優勝		4
第2回	昭57年	北見	優勝		4
	昭58年	雨天中止			
第3回	昭59年	釧路	優勝		4
第4回	昭60年	中標津	優勝		4
第5回	昭61年	網走	優勝		4
第6回	昭62年	北見	優勝		5
第7回	昭63年	釧路	優勝		5
第8回	平元年	紋別	優勝		5
	平2年	雨天中止			
第9回	平3年	中標津	優勝		5
第10回	平4年	網走	優勝	4位	8
第11回	平5年	北見	優勝		9
第12回	平6年	釧路	優勝		9
第13回	平7年	網走	優勝	3位	8
第14回	平8年	北見	優勝	7位	10
第15回	平9年	釧路	2位		9
	平10年	雨天中止			
第16回	平11年	網走	2位		
第17回	平12年	北見	2位		13
第18回	平13年	釧路	9位	10位	14
第19回	平14年	網走	5位	3位	14
第20回	平15年	北見	2位	7位	14
第21回	平16年	釧路	2位		8
第22回	平17年	網走	4位		9
第23回	平18年	北見	優勝		9
第24回	平19年	釧路	2位		12
第25回	平20年	網走	優勝		7
第26回	平21年	北見	2位		7
第27回	平22年	釧路	2位		7
第28回	平23年	網走	2位		9
第29回	平24年	北見	2位	雨	11
第30回	平25年	釧路	4位		11
第31回	平26年	網走	3位		11
第32回	平27年	釧路	2位		11
第33回	平28年	北見	2位	6位	11

１１．　北見テニス協会主催大会

１１－１　春季北見選手権テニス大会

長い冬が終わりテニスシーズンの到来を告げる春一番の大会である。第１回目と２回目は春季北見庭球選手権として、塩田杯(男女S)、鎌田杯（壮年 S)、北見市杯（男女 D）が同時に開催されている。参加者が多かったので、第３回大会からは北見市杯（男女D）を別日程で開催するようになった。

当初塩田杯は一般男女ダブルスだけであったが、平成２１年からは B 級男女種目が加わった。鎌田杯については、当初は参加者も多かったが、最近では大会が不成立になることがある。男子に加え、女子のベテランにも枠を広げているので、参加者が増えることを願っている。雨天での中止が一度あるが、４０回続いている協会の主要な大会である。

塩田杯、鎌田杯と個人の名前の付いた大会であるが、お二人について簡単に紹介したい。北見工大の教員であった塩田衍氏は、北見工大赴任間もなく学内にテニス同好会を作り、その仲間を中心に北見テニス協会を設立するために奔走された。まさに、協会設立の立役者であり、北糖の協力も得、軟式との調整などを進め、昭和５２年１月には設立総会を開催し、協会を誕生させてくれた。残念ながら、その直後の３月に３２歳の若さで他界された。その功績に報いるよう、ご家族の了解を得て大会名に残すこととした。

鎌田正甫氏であるが、若いころに硬式テニスをされた経験があり、北見市に硬式テニス協会ができることを熱望していた一人である。北見塗装(株)を経営されていたが、会社の入り口には北見ローンテニス協会と書いた看板があったと聞いている。協会設立に向け、会員拡大や印刷関連のお世話をボランティアで請け負っていただいた。当時で７０歳を超えていたかと思うが、最長老でしかも影の協会設立者でもあり、敬意を表して壮年の大会に名前を残した。

北見春季選手権（塩田杯、鎌田杯）戦績一覧

回数	年度	種　目	優　勝	準優勝	3　位	参加者数
第１回	昭 52 年	一般男子	小林　久人	常本　秀幸	岡　　宏	32
		一般女子	伊藤　信子	森谷久美子	河合　貞子	16
		壮年	泉　近	鎌田　正甫	本間　恒行	7
第２回	昭 53 年	一般男子	岡　　宏	常本　秀幸	森　雅夫	45
		一般女子	伊藤　信子	新井　歌子	伊東　定子	17
		壮年	伊東　秀雄	平山　光茂	本間　恒行	8
第３回	昭 54 年	一般男子	岡　　宏	常本　秀幸	伊東　秀雄	56
		一般女子	伊藤　信子	新井　歌子	宮澤由紀子	20
		壮年	平山　光茂	荒瀬　晃	大野　武敏	8
第４回	昭 55 年	一般男子	岡　　宏	鶴原　幹也	前田　寛之	56
		一般女子	伊藤　信子	新井　歌子	内藤　郁子	12
		壮年	伊東　秀雄	荒瀬　晃	泉　近	6
第５回	昭 56 年	一般男子	岡　　宏	枝川　滋	常本　秀幸	43
		一般女子	伊藤　信子	平野　容子	寺前　信子	18
		壮年	伊東　秀雄	新井　義夫	加藤	3
第６回	昭 57 年	一般男子	岡　　宏	常本　秀幸	藤池　保夫	40
		一般女子	伊藤　信子	高木　厚子	伊東　定子	18
		壮年	鎌田　正甫	加藤		2
第７回	昭 58 年	一般男子	岡　　宏	池端　治雄	常本　秀幸	58
		一般女子	伊藤　信子	小山田博子	伊東　定子	19
		壮年	新井　義夫	鎌田　正甫		2
第８回	昭 59 年	一般男子	常本　秀幸	尾花　仁康	岡　　宏	50
		一般女子	伊藤　信子	石川優美子	荒瀬　拓代	22
第９回	昭 60 年	一般男子	岡　　宏	源　和雄	長谷川智仁	39

		一般女子	森　幸子	信太　寿子	加藤　幸子	14
第 10 回	昭 61 年	一般男子	長谷川智仁	皆川　正広	岡　　宏	32
		一般女子	信田　寿子	金一きみ子	山野　郁恵	15
		壮年	高谷　俊光	伊東　秀雄	厚谷　郁夫	4
第 11 回	昭 62 年	一般男子	長谷川智仁	皆川　正広	岡　　宏	24
		一般女子	信太　寿子	矢俊八重子	五十田順子	16
第 12 回	昭 63 年	一般男子	長谷川智仁	土田　雅人	岡　　宏	23
		一般女子	皆川　縁	山野　郁恵	高橋　香織	8
第 13 回	平元年	一般男子	渡辺　次彦	町田　求	伊藤　直人	25
		一般女子	五十田順子	山野　郁恵	新里　順子	16
第 14 回	平 2 年	一般男子	皆川　正広	長谷川智仁	土田　雅人	34
		一般女子	山野　郁恵	長谷川香織	下田　幸江	14
第 15 回	平 3 年	一般男子	皆川　正広	長谷川智仁	土田　雅人	31
		一般女子	皆川　縁	柴崎紀美子	山野　郁恵	16
第 16 回	平 4 年	一般男子	皆川　正広	土田　雅人	湯浅　健司	27
		一般女子	皆川　縁	山野　郁恵	下田　幸江	17
		壮年	田崎　純	信太　寿雄	宮下　忠	4
第 17 回	平 5 年	一般男子	土田　雅人	湯浅　健司	高谷　俊光	17
		一般女子	山野　郁恵	皆川　縁	三原　一美	16
第 18 回	平 6 年	一般男子	坂本　一	皆川　正広	中野誠二郎	42
		一般女子	三原　一美	皆川　縁	山野　郁恵	22
第 19 回	平 7 年	一般男子	皆川　正広	長谷川智仁	柴野　貴聡	16
		一般女子	長　由美子	三原　一美	山野　郁恵	7
第 20 回	平 8 年	雨天中止				
第 21 回	平 9 年	一般男子	永山　誠	脇　伸一	高谷　俊光	9
第 22 回	平 10 年	一般男子	脇　伸一	永山　誠	望月　剛	17
		一般女子	三原　一美	芳形　可奈	宮田　雅代	12
第 23 回	平 11 年	一般男子	長谷川智仁	永山　誠	湯浅　健司	8
		一般女子	三原　一美	芳形　可奈	高橋真由美	14
		壮年	高谷　俊光	川森　勉	山田　孝一	6
第 24 回	平 12 年	一般男子	江間　修	皆川　正広	林　　吾朗	14
		一般女子	高橋真由美	松浦　綾乃	鶴田　直子	18
第 25 回	平 13 年	一般男子	永嶋　秀樹	林　　吾朗	永山　誠	19
		一般女子	三原　一美	中川美奈子	渋谷由紀子	12
		壮年	伊藤　陽司	山田　孝一	山口　茂利	4
		４５歳女子	高橋真由美	幡鎌満里子	矢代　千春	4
第 26 回	平 14 年	一般男子	永山　誠	北野　宏幸	伊藤　陽司	17
		一般女子	三原　一美	高橋真由美	永山　恭子	15
第 27 回	平 15 年	一般男子	永山　誠	中島　鉄男	宮城　雅章	17
		一般女子	岩原　裕美	脇　優子	和田喜代子	11
第 28 回	平 16 年	一般男子	山原　光広	内田　雅人	妹尾　一誠	14
		一般女子	脇　優子	木谷二三代	堀尾恵美子	7
第 29 回	平 17 年	一般男子	長谷川智仁	宮城　雅章	藤木　敏也	32
		一般女子	長谷川一美	永山　恭子	脇　優子	7
第 30 回	平 18 年	一般男子	長谷川智仁	脇　伸一	亀山　大貴	22
		一般女子	長谷川一美	永山　恭子	植松　美保	7
第 31 回	平 19 年	一般男子	村上　慎一	長谷川智仁	皆川　正広	24
		一般女子	村上　香	長谷川一美	堀尾恵美子	10
第 32 回	平 20 年	一般男子	村上　慎一	長谷川智仁	山原　光広	17
		一般女子	長谷川一美	鈴木　結華	下司　知世	8
		壮年	山田　孝一	尾藤　清光	前田　寛人	3
第 33 回	平 21 年	一般男子	村上　慎一	杉本　嘉久	徳田　奨	5
		Ｂ級男子	福島　直宏	斎藤　英彰	宮澤　航太	7
		壮年	宮城　雅章	北野　宏幸	小林　隆	3
第 34 回	平 22 年	一般男子	村上　慎一	長谷川智仁	杉本　嘉久	9
		Ｂ級男子	山田　孝一	上地　直昭	福島　直宏	9
		Ｂ級女子	脇　優子	渡辺　総	松井　知佳	3
		一般女子	長谷川一美	脇　優子	越田　菜月	3
		Ｂ級男子	平井　久文	上地　直昭	内田　雅人	7
		壮年	児玉　忠司	山田　孝一	斎藤　勇	3
第 36 回	平 24 年	一般男子	玉井　啓博	長谷川智仁	日下部　隆	13
		一般女子	長谷川一美	平野　晴菜		3

		Ｂ級男子	高橋　克己	松井　太	熊谷　淳史	6
		Ｂ級女子	高橋　和	早坂　総		4
		壮年	山田　孝一	児玉　忠司		4
第 37 回	平 25 年	一般男子	平野　拓馬	日下部　隆	竹口　尚孝	29
		一般女子	狩野　繁子	島宮　佳苗	桶口いずみ	5
		Ｂ級男子	菊地　亮	佐々木諒太	丸山　幸輝	16
		Ｂ級女子	安原　千尋	福士　陽子	赤澤　佑衣	5
		壮年	北野　宏幸			3
第 38 回	平 26 年	Ａ級男子	平野　拓馬	柴田　大輔	藤井　満	27
		Ａ級女子	桶口いずみ	狩野　繁子	三國谷真弓	6
		Ｂ級男子	徳岡　秀樹	澤野　勝三	高橋　皓也	15
第 39 回	平 27 年	Ａ級男子	川浪　諒	武田　陸	関澤　佑介	17
		Ａ級女子	小川　椎菜	青山　美幸	安原　千尋	5
		Ｂ級男子	後藤　範夫	畠　一凱	児玉　忠司	13
		Ｂ級女子	鏡　凪紗	堰代　夏海		4
		ベテラン男子	杉本　嘉久	山田　孝一		4
第 40 回	平 28 年	Ａ級男子	藤井　満	大石　将己	関澤　佑介	26
		Ａ級女子	岡本　真理子	三國谷　真弓	久原　美那	5
		Ｂ級男子	前田　敏貴	山田　孝一	長澤　拓哉	13

１１－２　北見市杯から阿部スポーツ杯、そして春季北見ダブルス大会

協会創立時に北見市より北見市杯を寄贈いただき、北見市杯争奪ダブルス大会の名称でスタートした。その後、阿部スポーツ(株)からスポンサーの申し出があり、管内からの参加が可能な阿部スポーツ杯争奪ダブルス大会となった。

阿部スポーツ(株)は網走に本店があって、スポーツ全般を扱っていたが、北見店ではテニスにかなりのスペースを割き、普及にも取り組んでいただいた。当初は現在の市の駐車場ナップス付近にあったが、その後三輪町に移転、一時期、市内で一番大きなスポーツ店だったと思う。社員の中にもテニスの上手な人がいて、用具の選定でも適切なアドバイスをしてくれた。しかし、本州資本のスポーツ店が出店してからは勢いがなくなり、平成１８年でスポンサーを下りられたので、その後、この大会は協会単独開催の春季北見ダブルス選手権として現在に至っている。なお、平成２０年までは一般の男女ダブルスだけであったが、平成２１年から B 級男女ダブルスも加わり、参加者数も増え、平成２４年の大会では１３６人が参加している。

北見市杯争奪ダブルス大会戦績表

回数	年度	種　目	優　勝	準優勝	3　位	参加者数
第 1 回	昭 52 年	一般男子	岡・常本	小林・鶴原	岩原・角谷	34
		一般女子	森谷・伊藤	河合・和田	浦田・山崎	16
第 2 回	昭 53 年	一般男子	岡・森谷	池端・田中	常本・鈴木	52
		一般女子	伊東・新井	平山・小林	伊藤・宮沢	18
第 3 回	昭 54 年	一般男子	岡・千葉	大島・森谷	常本・小畑	56
		一般女子	伊藤・宮沢	新井・内藤	伊東・小林	20
第 4 回	昭 55 年	一般男子	岡・常本	鈴木・小畑	枝川・小幡	56
		一般女子	伊藤・田中	新井・伊藤	小林・内藤	16
第 5 回	昭 56 年	一般男子	岡・常本	枝川・小幡	池端・田中	54
		一般女子	伊藤・田中	新井・伊東	小山田・石川	22
第 6 回	昭 57 年	一般男子	岡・常本	大野・新田	奥屋・山内	50
		一般女子	小山田・石川	伊東・小林千	新井・内藤	16
第 7 回	昭 58 年	一般男子	岡・常本	池端・藤池	桂川・関村	36
		一般女子	小山田・石川	新井・伊東	小沢・菅原	18
第 8 回	昭 59 年	一般男子	岡・常本	池端・伊藤陽	源・町田	46
		一般女子	伊藤・石川	伊東・新井	小林・宮浦	26
第 9 回	昭 60 年	一般男子	池端・伊藤陽	岡・常本	源・町田	26

		一般女子	伊藤・石川	金一・森	小林・加藤	20
第 10 回	昭 61 年	一般男子	皆川・伊藤直	岡・常本	大島・伊藤陽	32
		一般女子	伊藤・石川	皆川・信太	新里・小林	22
第 11 回	昭 62 年	一般男子	岡・常本	湯浅・十田	岩橋・町田	24
		一般女子	石川・皆川	菅原・矢後	山野・五十田	14

阿部スポーツ杯争奪ダブルス大会戦績表

回数	年度	種目	優勝	準優勝	3 位	参加者数
第 1 回	昭 63 年	一般男子	皆川・長谷川	湯浅・渡辺	岩橋・十田	40
		一般女子	石川・伊藤	皆川・高橋	五十田・山野	18
第 2 回	平元年	一般男子	町田・長谷川	皆川・渡辺	伊藤陽・岩橋	44
		一般女子	石川・五十田	皆川・長谷川	山野・桶口	28
第 3 回	平 2 年	一般男子	皆川・長谷川	湯浅・十田	菊池・岩原	34
		一般女子	石川・伊藤	五十田・柴崎	下田・山野	28
第 4 回	平 3 年	一般男子	湯浅・十田	皆川・平井	長谷川・町田	52
		一般女子	石川・伊藤	姫田・桶口	下田・山野	34
第 5 回	平 4 年	一般男子	湯浅・十田	町田・長谷川	中野・山田	42
		一般女子	石川・伊藤	山野・皆川	下田・姫田	30
第 6 回	平 5 年	一般男子	皆川・中野	十田・湯浅	長谷川・町田	30
		一般女子	石川・皆川	柴崎・渡辺	三原・五十田	20
第 7 回	平 6 年	一般男子	皆川・坂本	十田・湯浅	伊藤直・平田	38
		一般女子	石川・皆川	山野・渡部	三原・岩原	24
第 8 回	平 7 年	一般男子	湯浅・坂本	平田・伊藤直	永山・脇	36
		一般女子	山野・渡辺	石川・皆川	三原・長谷川	26
第 9 回	平 8 年	一般男子	皆川・坂本	湯浅・海野	山本・良知	22
		一般女子	山野・渡辺	皆川・石川	小野・高橋	16
第 10 回	平 9 年	一般男子	望月・前田	伊藤・海野	大島・伊藤	48
		一般女子	山野・渡辺	長・信太	古田・大桜	68
第 11 回	平 10 年	一般男子	皆川・坂本	長谷川・脇	伊藤・佐藤	64
		一般女子	石川・皆川	山野・渡辺	三原・佐藤	56
第 12 回	平 11 年	一般男子	坂本・福田	海野・津田	湯浅・伊藤	56
		一般女子	山野・渡辺	高橋・幡鎌	石川・岩原	60
第 13 回	平 12 年	一般男子	坂本・皆川	湯浅・伊藤	林・菊地	44
		一般女子	石川・皆川	山野・渡辺	高橋・幡鎌	44
第 14 回	平 13 年	一般男子	長谷川・海野	皆川・山本	菊地・林	32
		一般女子	三原・渋谷	高橋・岩原	荒井・菊谷	38
第 15 回	平 14 年	一般男子	皆川・山本	伊藤陽・田中	永山・脇	44
		一般女子	荒井・菊谷	渋谷・中川	高橋・松浦	26
第 16 回	平 15 年	一般男子	山本・鈴木	百々・伊藤	永山・脇	56
		一般女子	荒井・中川	高橋・古田	長谷川・渋谷	28
第 17 回	平 16 年	一般男子	永山・脇	北野・山原	今野・城崎	44
		一般女子	荒井・菊谷	中川・山野	長谷川・長橋	24
第 18 回	平 17 年	一般男子	北野・山原	今野・妹尾	永山・脇	80
		一般女子	荒井・和田	永山・北野	山野・渡辺	34

春季北見ダブルス選手権戦績表

回数	年度	種目	優勝	準優勝	3 位	参加者数
第 1 回	平 18 年	一般男子	永山・郷久	福田・脇	北野・北原	42
		一般女子	荒井・山野	高橋・岩原	北野・中川	24
第 2 回	平 19 年	一般男子	田中・千代延	皆川・村上	仲原・荒木	34
		一般女子	和田・荒井	高橋・岩原	渡辺・佐藤	34
第 3 回	平 20 年	一般男子	村上・杉本	山原・奥野	脇・長谷川	38
		一般女子	山口・荒井	渡辺・長谷川	工藤・山地	36
第 4 回	平 21 年	一般男子	工藤・藤井	北野・山原	脇・長谷川	22
		一般女子	玉田・長谷川	工藤・岡本	宮澤・井上	18
		B 級男子	横田・熊谷	佐藤・斉藤	前田・前田	8
		B 級女子	佐川・篠木	橋本・大沢	吉田・森谷	14
第 5 回	平 22 年	一般男子	村上・山原	永山・脇	杉本・藤井	34
		一般女子	長谷川・桶口	宮澤・井上	高橋・小野	22
		B 級男子	宮澤・堀内	林・鹿内	井上・越智	18
		B 級女子	成田・船橋	井上・松山	二神・平山	10

第 6 回	平 23 年	一般男子	杉本・藤井	長谷川・脇	湯浅・寺田	36
		一般女子	高橋・小野	宮澤・井上	長谷川・桶口	34
		Ｂ級男子	山田・伊藤	徳田・桶口	山田・小室	32
		Ｂ級女子	渡辺・白井	佐々木・鈴木	野口・上野	10
第 7 回	平 24 年	一般男子	竹中・中郡	長谷川・脇	杉本・湯浅	48
		一般女子	太見・小川	長谷川・宮澤	桶口・井上	32
		Ｂ級男子	湯川・山野辺	竹腰・渥美	熊谷・福島	32
		Ｂ級女子	松井・高橋	竹次・馬場	川口・野村	24
第 8 回	平 25 年	一般男子	玉井・平野	脇・秋元	杉本・柴田	30
		一般女子	安達・岡本	井上・宮澤	嶋宮・浅倉	30
		Ｂ級男子	熊谷・曽根	松井・萩山	前田・河野	32
		Ｂ級女子	中村・舟山	佐々木・鶴見	後藤・宍戸	12
第 9 回	平 26 年	Ａ級男子	杉本・柴田	菊地・脇	秋元・竹中	38
		Ａ級女子	和田・菊地	安達・岡本	宮澤・長谷川	32
		Ｂ級男子	野嶋・井上	江上・高橋	上野・吉田	32
		Ｂ級女子	桶口・山崎	鹿中・元氏	笠井・古山	32
第 10 回	平 27 年	Ａ級男子	長谷川・脇	杉本・秋元	武田・石澤	42
		Ａ級女子	岡本・秋元	和田・菊地	桶口・宮澤	28
		Ｂ級男子	森田・本間	児玉・高橋	大関・橋本	32
		Ｂ級女子	片山・板野	川瀧・七條	桝井・竹次	32
第 11 回	平 28 年	Ａ級男子	武田・川谷	坂・山岸	関澤・大谷	26
		Ａ級女子	和田・菊地	宮澤・長谷川	古瀬・岡本	18
		Ｂ級男子	鈴木・柳瀬	小林・武田	笹渕・北村	32
		Ｂ級女子	伊藤・水野	小坂・佐藤	黒川・宮浦	32

その他の試合結果について、以下省略

１２．　女子連北海道北見地区の活動

協会発足時から女性テニス愛好者を増やすために、女性部門が設けられていたが、協会内の女性担当あるいは女子部として位置づけられていた。平成５年に女子部役員が中心となり、日本女子テニス連盟北海道支部（以後、女子連北海道とする）に北見地区として加盟することになった。皆さんの賛同を得、初代地区長石川優美子さんの下、活動を開始している。加盟から２５年近くとなり、北見地区会員も７０人近くになっているが、会員には北見市内ばかりでなく、オホーツク圏のテニス愛好者にも参加してもらっており、これらの方々と以下に示すような事業を行っている。

上部組織は日本女子テニス連盟（JLTF、以降、日本女子連とする）であり、北見地区はその傘下の女子連北海道に所属し、全道 8 地区の一つとして登録されている。日本女子連は５０年の歴史を有しており、女性へのテニスの普及ばかりでなく、ジュニアの育成や支部あるいは地区の活動を支援しており、その活動は高い評価を得ている。一方、女子連北海道であるが、昭和６０年に設立され、間もなく４０周年になる。女子連北海道の役員が北海道テニス協会の主要な役員として参画しており、女子連は道テニス協会運営に欠かせない存在になっている。北見地区でも状況は同様であり、北見テニス協会もこれまでの歴代地区長（石川優美子、山野郁恵、高橋真由美、宮田雅代、宮澤つぼみ）はじめ、役員皆さんのご協力で運営されており、感謝申し上げたい。

なお、女子連北見地区と北見テニス協会とは強い連携関係にあるが別組織であり、両者の関係をどのようにするか議論されたことがあったが、結果的には、女子部時代と同様に相互協力で両組織を運営することになったと聞いている。たとえば、議案書には女子連・女子部と表示し、行事予定表や戦績結果は両組織で併記する。ただし、組織が異なることから、収支決算は別個に行うことにしている。いずれにしても、北見テニス協会は運営面でも競技力の面でも常に女子連にお世話になっており、今後もこのような連係プレーを続け両組織の発展を願うものである。

女子連北海道北見地区歴代役員一覧

年　度	地区長	副地区長		会　計	監　事	指導顧問
平６年	石川優美子			長　由美子		
平７年	山野　郁恵			長　由美子		
平９年	山野　郁恵			高橋真由美		
平１０年	高橋真由美	宮田　雅代		出村　澄子		
平１２年	宮田　雅代	伊藤　慧子		中村　典子		
平１６年	宮田　雅代	長部こずえ	菅野成津子	森本可恵子		
平１７年	宮田　雅代	長部こずえ	菅野成津子	武田美智子		
平１８年	宮澤つぼみ	長部こずえ	菅野成津子	武田美智子		
平２１年	宮澤つぼみ	長部こずえ	井上まゆみ	武田美智子		
平２２年	宮澤つぼみ	長部こずえ	井上まゆみ	久光美代子	仲西　厚子	
平２３年	宮澤つぼみ	長部こずえ	井上まゆみ	久光美代子		中塚ひとみ
平２５年	宮澤つぼみ	長部こずえ	井上まゆみ	三上めぐみ		
平２９年	宮澤つぼみ	長部こずえ	井上まゆみ			

１２－１　各種大会

女子連の大会は大きく分けると三つに分類できる。一つは、北海道８地区親睦テニス大会北見地区予選や WE LOVE DUNLOP レディース大会、今はなくなったが東急レディース大会のように全道大会あるいは全国大会の代表権をかけた大会。二つ目は、伊藤慧子メモリアルテニス大会やそれに続く AUTUMN レディーステニス大会のように競技力向上を目指した北見地区独自の大会。もう一つは、底辺の拡大と会員定着、あるいは懇親を重視した桑名杯及・支部長杯Ｂ級レディーステニス北見大会、チャレンジテニス大会、あるいはエンジョイテニス大会、今はなくなったが、女子部時代に開催された TUESDAY レディーステニス大会などである。なお、女子連主催の大会への参加は女子連会員が原則となっているが、エンジョイテニス大会

のように、北見テニス協会会員なら参加でき、しかも男性も認められている大会もある。

1) 北海道８地区親睦テニス大会北見地区予選

現在道内には日本女子連北海道支部に登録されている地区が８地区あり、地区予選会での勝者による全道親睦大会が道内各地区持ち回りで開催されている。北見地区予選大会は平成６年から始まったが、全道大会の回数に合わせたため大会回数が第５回となっている。この年から勝者を中心にチームを作り帯広での全道大会に参加しているが、地区大会の記録が残っていなかった。帯広大会では７地区との対戦があり、８チーム中５位であった。（開催地区は２チーム参加できるため８チームでの対戦になる。）

平成１０年までは７地区であったが、翌年より函館が加わり８地区で予選大会が開催されている。大会名は、女子連８地区対抗予選大会とか女子連春のテニス大会などと言われた時期もあったが、平成２１年からは JLTF 北海道８地区対抗戦北見地区予選大会と長い名前になり、平成２６年に現在の JLTF 北海道８地区親睦テニス大会北見地区予選大会となっている。競技種目もその時代時代に応じて、年齢制であったり、Ａ、Ｂ、Ｃのクラス分けとかオープン表示だったりしているが、現在は地区のトップ選手が代表権を争う大会になっている。

全道大会は一般ダブルス２ペアとシニア１ペアで戦うが、なんと、平成２１年の大会では優勝の栄冠を得ている。また、この時の夜の交流会の余興でも優勝したそうだ。

JLTF 北海道８地区親睦大会北見地区予選大会戦績表

回数	年度	種目	優　勝	準優勝	3 位	参加者数	道大会開催地	順位
第 5 回	平 6 年	記録なし					帯広	5 位
第 6 回	平 7 年	30 歳女子	長谷川・松原	朝倉・滝川	高橋・小野		札幌	6 位
		40 歳女子	山野・渡辺	山口・早坂	西部・桜井			
		50 歳女子	加藤・本田	福浦・亀岡	石津・吉田			
第 7 回	平 8 年	30 歳女子	長谷川・三原	岩原・古田	佐々木・荒井	20	北見	A:6 位
		40 歳女子	小野・高橋	山口・早坂	渡部・桜井	24		B:7 位
		50 歳女子	前田・保前	福浦・亀岡	相原・本田	8		
第 8 回	平 9 年	30 歳女子	三原・佐藤	両角・村瀬	高橋・小野	22	千歳	2 位
		40 歳女子	渡辺・大谷	赤井・月岡	笠井・三沢	14		
		50 歳女子	福浦・亀岡	本田・桜岡		4		
第 9 回	平 10 年	30 歳女子	荒井・高桑	岩原・大桜	両角・村瀬	36	旭川	7 位
		40 歳女子	佐藤・渡辺	高橋・幡鎌	渡部・桜井	26		
		50 歳女子	山野・大谷	田代・嘉義		10		
第 10 回	平 11 年	一般女子	渡辺・山野	両角・村瀬	高橋・小野	32	札幌	6 位
		シニア女子	加藤・出村	本田・佐々木	岸・桜岡	6		
第 11 回	平 12 年	30 歳女子	荒井・高橋	清信・佐藤	佐藤・松田	20	小樽	7 位
		40 歳女子	鶴田・小野	古田・岩原	中村・月岡	18		
		シニア女子	増田・相原	矢代・幡鎌	渡部・桜井	10		
第 12 回	平 13 年	Ａ級女子	吉田・岩原	荒井・小坂	西川・福田	20	室蘭	6 位
		Ｂ級女子	佐藤・清信	森谷・元氏	荻原・三浦	30		
		Ｃ級女子	松永・佐々木	上口・星	国分・松重	12		
		シニア女子	増田・石山	福浦・岸	本田・伊藤	6		
第 13 回	平 14 年	オープン	荒井・松浦	高橋・岩原	菊谷・小野	54	函館	6 位
		シニア女子	出村・幡鎌	桜岡・前田	桜井・増田	8		
第 14 回	平 15 年	オープン	小野・和田	西川・福田	宮澤・福井	36	札幌	9 位
		シニア女子	桜井・小林	捧・河合	岡本・増田	10		
第 15 回	平 16 年	オープン	山野・岩原	高橋・小野	佐藤・古館	30	帯広	9 位
		シニア女子	増田・桜井	小坂・森谷	河合・捧	6		
第 16 回	平 17 年	オープン	高橋・佐藤	荒井・和田	菊地・山岸	42	旭川	8 位
		シニア女子	小野・河合	湯浅・小林	桜井・小坂	6		
第 17 回	平 18 年	オープン	荒井・和田	北野・中川	横山・鹿野	24	千歳	5 位
		シニア女子	高橋・小野	矢代・渡部	河合・捧	8		
第 18 回	平 19 年	オープン	長谷川・渡辺	荒井・植松	和田・山野	38	札幌	6 位
		シニア女子	河合・捧	桜井・与坂		4		
第 19 回	平 20 年	オープン	宮澤・和田	佐藤・工藤	岩原・鹿野	32	北見	A:７位

		シニア女子	菊谷・荒井	高橋・小野	捧・松重	8		B:9 位
第 20 回	平 21 年	オープン	中塚・和田	高橋み・長谷川	酒井・尾河	24	札幌	優勝
		シニア女子	高橋・小野	荒井・藤井	菊谷・捧	6		
第 21 回	平 22 年	オープン	長谷川・和田	井上・宮澤	鹿野・横山	24	室蘭	７位
		シニア女子	野嶋・長部			2		
第 22 回	平 23 年	オープン	荒井・和田	高橋・長谷川	野嶋・捧	18	旭川	６位
		シニア女子	井上・宮澤	滝川・狩野	高橋・小野	6		
第 23 回	平 24 年	オープン	井上・宮澤	長谷川・和田	鈴木・高畠	18	札幌	６位
		シニア女子	高橋・佐々木	野嶋・長部				
第 24 回	平 25 年	オープン	菊地・和田	大野・高岸	捧・長部	16	帯広	６位
		シニア女子	井上・宮澤	高橋・小野		4		
第 25 回	平 26 年	オープン	菊地・長谷川	和田・井上	鈴木・高畠	20	千歳	６位
		シニア女子	宮澤・長	高橋・小野		4		
第 26 回	平 27 年	オープン	和田・宮澤	鈴木・高畠	樋口・菊地	24	函館	２位
		シニア女子	長・井上			2		
第 27 回	平 28 年	オープン	和田・長谷川	樋口・井上	小嶋・小久保	16	札幌	３位
		シニア女子	宮澤・長	瀧川・狩野		4		

平成２１年の８地区大会で昼と夜の部で総合優勝した選手と監督と高谷会長

2) WE LOVE DUNLOP レディース & WE LOVE SRIXON レディース

平成１３年から女子連北海道北見地区とダンロップスポーツ(株)の共催で、WE LOVE SRIXON レディースを開催せいているが、この大会の勝者はニセコで開催の全道大会（平成２２～２４年は未開催）に招待される。女子テニスのレベルアップと底辺の拡大を目的とした大会であり、３０～４０人の参加であるが、毎年、地区代表を目指して熱戦が繰り広げられている。参加条件にダンロップ系のラケット、シューズ、ウエアーのいずれかを利用していることとなっており、これもスポンサーへの礼儀かと思う。

平成２５年の参加者の面々

全道大会は団体戦となることから、チームワークが重要であり、チームワークの良い北見地区はいつも上位に位置している。平成２５年は、女子連北海道北見地区結成２０周年になり、地区大会を２０周年記念大会として実施したが、この記念大会の地区代表チームは、２０周年を祝うように見事全道大会で優勝している。ハウス内にその時の写真が掲げられていたが、皆さんでこの快挙をお祝いしたようだ。さらに、この大会の呼び物である、レセプションでの余興でも北見チームは優勝しており、ここでもチームワークの成果を発揮している。

WE LOVE SRIXON レディーステニス大会戦績表

回数	年度	種目	優　勝	準優勝	3位	参加者数	道大会順位
第1回	平13年	A・B級女子	岩原・高橋	中川・荒井	西川・福田	40	7位
		C・D級女子	甲賀・畑澤	船木・土田	河野・中村	14	
		シニア女子	前田・桜岡	矢代・大滝	相原・増田	10	
第2回	平14年	A級女子	西川・福田	荒井・永嶋	福井・宮澤	18	5位
		B・C級女子	河合・湯浅	佐藤・峰	武田・菅野	28	
		C級女子	松本・仲野	松重・小林	越田・野口	10	
		シニア女子	増田・桜井	出村・岸	桜岡・矢代	8	
第3回	平15年	A級女子	松浦・宮澤	和田・小野	岩原・高橋	14	6位
		B級女子	湯浅・大瀧	木谷・松田	橋川・尾河	24	
		C・D級女子	藤田・越田	杉本・赤塚	山本・中本	14	
		シニア女子	矢代・信太	桜井・小林	前田・桜岡	6	
第4回	平16年	A級女子	荒井・和田	西川・福田	高橋・岩原	14	5位
		B級女子	嘉野・兒玉	佐藤・酒井	大滝・橋川	14	
		C・D級女子	武田と・中本	古館・上口	佐々木・大野	14	
		シニア女子	小坂・森谷	河合・捧	桜井・小林	8	
第5回	平17年	A級女子	和田・宮澤	高橋・佐藤	岩原・長谷川	10	4位
		B級女子	永山・北野	武田み・井上	山岸・菊地	16	
		C・D級女子	小林・中西	菅野・高橋	大野・中本	26	
		シニア女子	捧・矢代	湯浅・大滝	桜井・小林	6	
第6回	平18年	A級女子	長谷川・渡辺	北野・中川	植松・宮澤	8	4位
		B級女子	武田み・井上	武田と・捧	酒井・尾河	8	
		C・D級女子	長部・野々村	斉藤・高岡	大野・林	24	
		シニア女子	高橋・小野	湯浅・河合		4	
第7回	平19年	A級女子	長谷川・村上	渡辺・北野	荒井・和田	12	4位
		B級女子	長部・小野	尾河・峰	佐藤・酒井	8	
		C・D級女子	鈴木・中原	中西・小林	東坂・中尾	18	
		シニア女子	高橋・捧	矢代・河合	桜井・与坂	6	
第8回	平20年	A級女子	工藤・山地	宮澤・和田	長谷川・渡辺	8	2位
		B級女子	朝倉・狩野	尾河・峰	佐藤・酒井	8	
		C・D級女子	三國谷・瀬川	藤井・高岡	小林・松本	10	
		シニア女子	山口・荒井	小野・高橋	捧・河合	8	
第9回	平21年	A級女子	荒井・和田	宮澤・井上	工藤・長谷川	12	4位
		B級女子	捧・森木	林・大野	桐山・中尾	14	
		C・D級女子	松田・中西	松本・藤原	三上・玉井	12	
		シニア女子	小野・高橋	菊谷・藤井		4	
第10回	平22年	A級女子	長谷川・和田	宮澤・井上	田嶋・滝川	18	未開催
		B級女子	三國谷・香林	松田・中西	松本・大野	10	
		C・D級女子	目黒・高畠	下平・佐藤		14	
第11回	平23年	A級女子	和田・井上	長谷川・宮澤	鹿野・横山	10	未開催
		B級女子	松本・大野	目黒・高畠	野嶋・山本	10	
		C・D級女子	下平・佐藤	佐藤・山川	藤原・久光	20	
第12回	平24年	A級女子	長谷川・和田	宮澤・井上	松本・大野	6	未開催
		B級女子	鈴木・高畠	佐々木・高岡	捧・野嶋	6	
		C・D級女子	玉井・三上	高橋・篠根		20	
第13回	平25年	A・B級女子	和田・秋元	菊地・長谷川	鈴木・高畠	16	優勝
		C・D級女子	藤原・高岸	小関・青木	篠根・山川	18	
		シニア女子	小野・高橋	狩野・桐山	矢代・野嶋	6	
第14回	平26年	A・B級女子	和田・宮澤	鈴木・高畠	中西・河口	14	5位
		C・D級女子	小嶋・梅岡	小久保・小野	細川・馬場	16	
		シニア女子	長・井上	長谷川・野嶋	狩野・桐山	6	
第15回	平27年	A・B級女子	長谷川・和田	宮澤・井上	小嶋・梅岡	10	5位
		C・D級女子	角・森田	矢代・小関	高橋・大宮	16	
		シニア女子	小野・高橋	山川・篠根		4	
第16回	平28年	A・B級女子	和田・宮澤	鈴木・高畠	長谷川・菊地	10	4位
		C・D級女子	小野・小久保	斉藤・川崎	篠根・山川	20	
		シニア女子	長・井上	矢代・捧		4	

女子連の活動、以下省略
規定、申合せは省略
編集後記関連は原稿依頼中